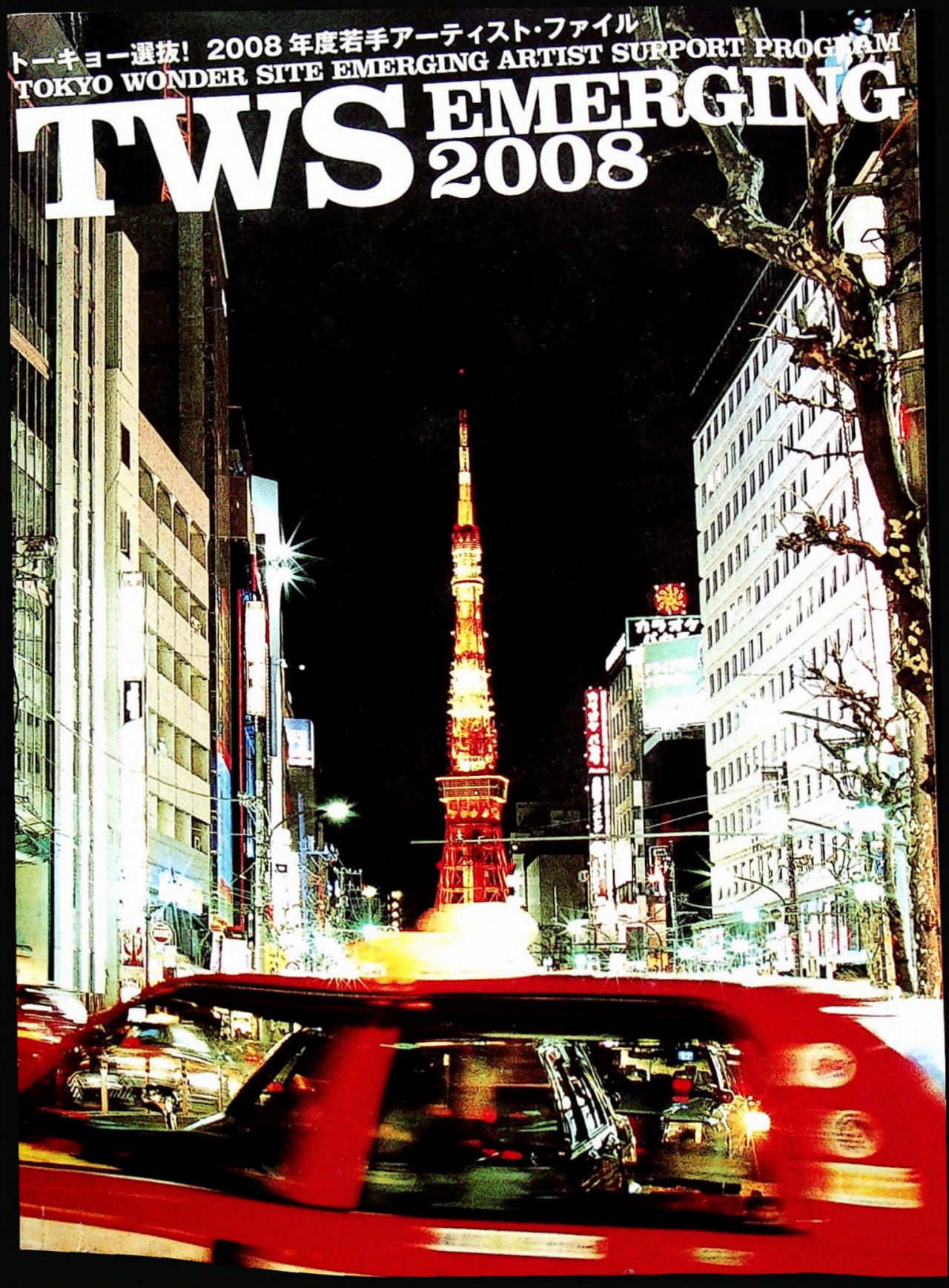


トーキョー選抜! 2008 年度若手アーティスト・ファイル
TOKYO WONDER SITE EMERGING ARTIST SUPPORT PROGRAM

TWS EMERGING 2008



OKYO WONDER SITE EMERGING ARTIST SUPPORT PROGRAM

TWS EMERGING 2008

アーティストのステップアップをサポート！

トーキョーワンダーサイトの若手支援・育成プログラム

TWS-Emergingとは？

2001年の開館以来、トーキョーワンダーサイト(TWS)は、様々な分野の若手支援、育成のプログラムを行ってきました。そのひとつであるTWS-Emergingは、東京都主催の公募展トーキョーワンダーウォール(TWW)と連携したプログラムです。TWWでは毎年1000名を超える応募者の中から100名が選出され、東京都現代美術館で展示を行います。さらにその中から12名の入賞者が、東京都庁3階の空中歩廊というパブリックな場所に展示する機会を得ます。TWS-Emergingは、この100名の入選者の中からTWSでの展示希望者を募り、審査を経て選出された作家をTWS本郷にて展示するものです。2008年度は19名が選ばれ、1年を通して順次紹介されました。選ばれた作家たちには、個展の開催にとどまらず、TWSでの様々なイベントやワークショップへ参加することを促すほか、展覧会後は、TWS渋谷での展示(TEAM)やTWS青山のクリエイター・イン・レジデンスを拠点にした海外のレジデンスとの交換プログラムへの派遣なども視野に入れ、各作家の活動をさらに広げることを目的とした支援を行っています。

若手コンペトーキョーワンダーウォール(TWW)で1000点以上から約100名の作品が入選し、東京都現代美術館で入選展を開催。うち12名が都庁で作品発表。

若手コンペワンダーシードで、10号以下の作品約1000点から約100点が選抜。TWS渋谷で作品を展示＆販売。

新人の登竜門、コンペで力試し

A gateway to success for newcomers, pit your skills against others in competitions

The work of approximately 100 artists is chosen from among more than 1,000 works submitted to the Tokyo Wonder Wall (TWW) emerging artist competition and an exhibition of the work selected is held at the Museum of Contemporary Art Tokyo. From this exhibition, the work of 12 people is chosen to be exhibited at the Tokyo Metropolitan Government Office. Approximately 100 medium-sized works (canvases 53 x 53cm or under) are selected from approximately 1000 works submitted to the Wonder Seeds emerging artist competition, and exhibited and sold at TWS Shibuya.

TWS本郷での企画TWS-Emergingで、TWW入選者の中から約20名の選抜者が、を開催。TWS渋谷併設のTWS Art Cafe kuraでも作品を展示。

念願の個展開催

Hold the solo show you've always dreamed of

With the TWS-Emerging project at TWS H, approximately 20 people are selected from a TWW winners each year to hold solo exhibits. Their work is also exhibited at the TWS Art kura inside TWS Shibuya.

プロのアーティストとして、
国際的に活躍！

Work on an international
stage as a professional artist!

TWS青山での協働スタジオプログラムなど国際交流企画への参加や、TWSと連携する海外のレジデンス・プログラムへの派遣。

海外のレジデンス・
プログラムに参加

Participate in an overseas residency program

Participation in international exchange projects including On Site Lab Workshop-Series at TWS Aoyama and in the international residency programs in partnership with TWS.

渋谷での企画TEAM、グループ展東京画
に参加。

らに本格的な展覧会で
品を発表

Exhibit work in respected
group shows

Participate in the TEAM project at TWS Shibuya and in group exhibition, Tokyo Painting.

What's TWS-Emerging?

Ever since its opening in 2001, Tokyo Wonder Site has undertaken a wide range of programs to support and foster young artists. One such program, **TWS-Emerging**, is associated with the **Tokyo Wonder Wall** exhibition sponsored by the Tokyo Metropolitan Government. Each year 100 people are selected from among more than a thousand who respond to the call from Tokyo Wonder Wall, and their works are displayed at the **Museum of Contemporary Art Tokyo**. A further process then selects 12 of those 100 for the opportunity to show their art to the wider public at the gallery in the third-floor corridor of the **Tokyo Metropolitan Government Building**. TWS-Emerging invites the same 100 artists to participate in another exhibition, and those chosen are put on display at **Tokyo Wonder Site Hongo**. In 2008, 19 young artists were picked to participate, and their works were displayed over a period of one year. Not only does each of the selected artists have their own individual exhibition, they are also invited to participate in a number of events and workshops at Tokyo Wonder Site venues throughout that year. And once their exhibitions have been staged, they are supported in various other ways to raise their profiles and expand their activities. They are eligible to exhibit their works in the **TEAM** program at Tokyo Wonder Site Shibuya, and to take up the post of creator in residence for a period at Tokyo Wonder Site Aoyama. They may also be sent overseas in Tokyo Wonder Site's international exchange programs.



CONTENTS

02 TWS-Emergingとは？

06 安田悠 — 097

10 西村加奈子 — 112

14 シムラユウスケ — 098

16 HyonGyon — 099

18 高倉吉規 — 100

20 塩川直子 — 101

22 青山裕企 — 102

24 黒川彰宣 — 103

26 吉田真由子 — 104

28 江幡京子 — 105

30 渋谷奈緒 — 106

32 日置智也 — 107

34 石井弘和 — 108

36 笹田晋平 — 109

38 永島千裕 — 110

40 伊藤雅恵 — 111

42 野田和宏 — 113

44 真坂亮平 — 114

46 増子博子 — 115

48 空き地—東京の感性の最前線 文=今村有策

50 表現のリアリティを希求する行為の軌跡 文=天野太郎

52 初心忘るべからず！ 文=宮村周子

54 内なる自己に愚直に向き合う感性 文=家村佳代子

56 個展を成功させるためのスキルを磨こう 文=白坂ゆり

59 アーティスト・プロフィール

各作家につく数字は、TWS-Emerging参加作家の通し番号です。

Numbers after the artist's names represent their number in the TWS-Emerging program.



097

安田悠

YU YASUDA

Fantasized Time

2008.6.7-29

「曖昧な時間と歪みからなる様々な要素を、断片的に紡いで作品にしたい」と安田悠は言います。いつか見たような、けれど初めて目にする景色を前にしたとき、地に足の着かない、ふわふわした浮遊感を感じることがあります。そうした、断片的な記憶が重なり、立ち現れてくる現実と非現実の狭間の白昼夢のような光景を、安田は独特の絵の具のタッチとやわらかな色彩とで描いていきます。ひょろりと立つ数人の男女は、森や水辺のある不可思議な景色に、そのまま溶け込んでしまいそうに、たよりなげに存在します。作品同士の間には、ストーリーが明確にあるわけではありませんが、スローモーションを見るような感覚で、私たちは背後の世界観を想像しはじめます。

"I like to take various elements from ambiguous times and distortions and spin them together fragmentarily to make artworks," says Yu Yasuda. When confronted with the scenes in his paintings, which look vaguely familiar even though we're seeing them for the first time, the viewer sometimes experiences a lighthearted floating feeling in which our feet don't seem to touch the ground. These scenes, like daydreams in a space that manifests itself between reality and unreality and in which fragmentary memories seem to overlap, are depicted by Yasuda in soft hues with a distinctive touch. Elongated male and female figures stand in mysterious landscapes with forests or shores, existing forlornly as if about to merge into the scenery. Although there is no clear story connecting the works, we begin to imagine the worldview behind them, as if viewing a scene in slow motion.





上) Fantasized Time 2008

油彩、カンヴァス Oil on canvas 112×162cm

下左) 展示風景 Installation view

下右) Near sky 2008

油彩、カンヴァス Oil on canvas 130.3×80.3cm



Yu Yasuda Interview

「絵が変化するときって、
僕はひたすら描かないと見えてこない」

「TWS-Emerging」のことは、最初よくわかってなくて。「トーキョーワンダーウォール2007」に入賞したので、トーキョーワンダーサイトの運営の方から、そろそろ応募切だけど、という連絡があって。「あ、そんなのあったんだ」と思って、すぐにファイルを送って審査に通って、面接受けて、展示が決まったんです。

「トーキョーワンダーウォール」に出したのは、卒業したあとに特に展示予定も決まっていなくて、公募っていうものにそれまで挑戦するということがなかったの、出してみようかなと。わりと皆、学生の頃から出してたけど、僕はまだ自信がなかった。卒業してひとりになり、人目に触れるところに作品を出していかないと何かヤバイなあ、と思ったからです。

大学院から武蔵美（武蔵野美術大学）に来たんですよ。こっちに来て「えっ、わかんねー」というのがあって、そこで揉まれました。それまでは福岡の教育系の大学で、教えることを前提としたシステムだったので、自分の描きたいものというよりは生徒に教えるための古典的な技法に忠実に描いていた。武蔵美に来て「これが現代アートと言われるものなんだ」って。もともと「美術手帖」なんかで見てはいたけど、目の前で同世代の学生が描いているのを見て、「こういうことか」って。皆、何か新しいものを見つけようと、それなりに自分のスタイルをつくってやってるのに、僕には何もないって、イライラしながらとにかく描いてました。

2年のときに描いていた〈OVERFLOW〉という油彩を、ちょうど大学に来られていたギャラリストの方が見て、「すごいいい」と言ってくれて、単純に、「いいんだ!」と思って、それが、この方向で自分なりにちょっと展開していけるかもしれないと思った最初のきっかけです。

「TWS-Emerging」はひとつの区切りにしたかったんです。それまでもかなり作品を買っていただいていたのですが、そうした場合に思われている僕の作風というか、安田の絵はこうだっていうものとの区切りです。金融危機以降、先の展示も決まっていなかったんですけど、逆にいろいろなしりばから自由になって、もうすこし自分と向き合える時間がつくれるかもしれないって思っています。もちろん、売れることはうれしいことなんですけど、その絵を見て買いたいということは、期待されている絵をださなきゃいけないというプレッシャーにもなりますよね。だから、またちょっと変わってきていますね。恵比寿のギャラリーに出したのもや、家村さんに推薦していただいて「トヨタアートコレクション 2008」に出したものは、ちょっとこれまでとは違うタイプです。これからは、もっと具体的にでないようなもの、アブストラクトな表現を強くしたものも描いていきたいと思っています。

卒業してすぐ、修了展の流れで「ART AWARD TOKYO」に誘われて、そのときの審査員のひとり、東京オペラシティアートギャラリーの飯田志保さんの推薦で「VOCA 2008」に出品したりという展開があって、流れに乗っかってやってきたのが去年まで。それがぴたっと止まったので、逆にそれが、自分と向き合っているのって試してみるのにはいい時期なのかなと思っています。

絵が変化するときって、僕はひたすら描かないと見えてこない。コンセプトを考えてっていうふうにはできないので、いっぱい手を動かして、色が変わるかもしれないし、今年が自分のなかで勝負だと思っています。追われているというか、描かなきゃバイ、という強迫観念があったり、でも描いているときは安心感があったり、その微妙なラインで描いています。



12

西村加奈子 KANAKO NISHIMURA

妖精／眠る場所
fairy/sleeping place
2008.10.25-11.16

東京在住の西村加奈子は、故郷の広島に帰郷したとき、突然、実家の仏壇に違和感を覚えたのだと言います。かつては毎日目にしていたものが、ある日突然、新鮮な感覚で見えてくる驚き。彼女はそれを絵に表すべく、仏壇を画面いっぱいに描きました。他にも、見慣れたマイセンの器の絵柄や、庭の木々や草花などが彼女のとり上げるモチーフです。「土地に息づいているもの、土から命を吹き込まれたようなもの」がもつ、「土着的な生命力」に惹かれる、と彼女は語ります。アートシーンで流行となっているスタイルではなく、自分自身に染みついたイメージを再発見し、それらを愚直なまでにストレートに炷上に載せるいさぎよさは、新しい絵画の誕生を予感させます。

Tokyo resident Kanako Nishimura talks about how when she went back to her hometown of Hiroshima, the Buddhist altar in her family home suddenly took on a strange appearance. The shock of suddenly seeing something one once saw every day in a completely new light. In an attempt to convey this in a painting, Nishimura depicted the Buddhist altar taking up the entire canvas. Other motifs used in her work include the familiar patterns from Meissen porcelain and garden trees and flowers. According to Nishimura, she is drawn to the "indigenous sense of vitality" of "things that live in the earth and things that are imbued with life from the soil." The integrity with which she rediscovers images deeply ingrained within herself and lays them out honestly almost to a fault, which is quite different from the style currently fashionable in the art scene, hints at the emergence of a form of new painting.



上) 展示風景 Installation view

下左) 夏の夜の庭 The garden of night in summer 2008

油彩、カンヴァス Oil on canvas 130.3×194cm

下右) 仏壇 Buddhist altar 2007

油彩、カンヴァス Oil on canvas 162×130cm





Kanako Nishimura Interview

「普通に描いて絵になることが
一番だと思っているんです」

私が「トーキョーワンダーウォール」に応募したのは、トーキョーワンダーサイト本郷の空間で展示をしたかったからなんです。「TWS-Emerging」の展示は今のところ自分の中のベスト、自分の世界が出せたかなと思っています。仏壇の絵だけで構成すればよかったのと言う方もいましたが、知人のアーティストに、あらためて自分も絵を描きたくなったと言われたのがかなりうれしかったです。

展覧会のタイトルに関しては、その時点で決まっていたのが卒展に出した仏壇の絵だけだったので、いっそ「仏壇」でもよかったんですが、全体として広島の実家の雰囲気を出したいと思って、「眠る場所」にしました。「妖精」という言葉は、自分がなんとなく惹かれる土着的なもの、アニミズム的なものの隠喩として選びました。

私は、こう、あまり言葉にしないタイプです（笑）。典型的な、絵だけ描いていた人です。何を描いても絵にできる人になりたいなとは思っています。小学生のときに写生とか描くじゃないですか、そのときと同じように描いても絵になるようにしたいと思っています。テクニックみたいなところで特別なことはあまりしたくないんです。見たままに描いてそれが絵になるというのが理想です。見たものを変形させて独特の画面をつくるようなタイプではないんです。何もしなくても普通に描いて絵になることが一番だと思っているんです。今は、本当に自然に自分の中から出てくるものは何なのか、が見たいです。

油絵具に対するこだわりはずっと持っています。油絵具自体がものすごく好きなんです。匂いも質感も。油絵を描き始めた頃から、油絵具を使わせたら一番絵具がきれに見える人になりたいと思っていました。油絵具の光を内に閉じ込めたような輝きの中にももの生命感まで一緒にとじ込めてしまいたいと思っています。美大に行こうと思った頃のことは正確に思い出せませんが、自分には人と違うものがあると思ったんだと思います（笑）。当時は西洋の巨匠の作品をよく見ていましたが、日本の油絵のどろくさい感じも好きでした。

仏壇を描こうと思ったきっかけというのは、自分でもよくわかりません。実家に帰っていたときにふと思いついたんです。普通の和室の部屋にある仏壇を見て、こんなにキラキラしたものが日常空間の中にあるということに違和感を感じたんです。最初に描いた仏壇は卒業制作ということで気持ちが高揚していたこともあって、わりと時間をかけて描きました。

違和感を感じるものや風景が、自分の“描きたい”というモチベーションのもとになることが多いです。奇妙だなと思うものや、何かが隠れているような雰囲気や存在感に不思議な生命感を感じるので、それを絵の中に表現できたらと思います。これまでに描いたのは、実家の庭、岩、庭に立つ父、兎と岩、鹿、マイセン、壺……。自分の原風景として、実家の庭にあった奇妙な形をした岩というのがあったと思います。「TWS-Emerging」で卒制の仏壇と対にして展示した新作の仏壇は同じ実家のお盆バージョンです。仏壇シリーズはもう一回くらい描きたいと思っています。鎌倉の櫓を次にねらっています。

あと、ストレートに絵に向かい合いたいと思っています。学生の頃、「君の絵にはウソがない」と言われたことがありました。自分と絵の間にウソがないこと、というのは作品をつくる時いつも考えています。

98

シムラユスケ YUSUKE SHIMURA

WITCH

2008.6.7 - 29

交差点にたたずむ、全身黒装束の老婦人。心理学の本とビニール袋を抱えた彼女は、魔法使いのような不思議なオーラを周囲に振りまいています。シムラユスケは、ニューヨークの街角で遭遇したホームレスを瞬発的に連続撮影し、その写真と映像とを展示しました。どの街にもいる、人々の噂にのぼるマジカルな存在を、彼は舞台女優を撮影するようにとらえ、展示では各写真にスポットを当てて劇的な効果を意識しました。身軽に未知の場所を旅するシムラは、たとえば駅で見かけた人々のたたずまいを虚構のように切り取り、虚実の時空を組み替えます。また、人々が夢と希望を求める構図を普遍的な価値として描いたドローイング作品では、特定のキャラクターを連続して登場させるなど試み、一貫して全ての作品で、世界を驚きと不思議で満たす鍵を探しています。

An old woman dressed in black stands at an intersection. Clutching a book on psychology and a plastic bag, she sends out a mysterious aura like a sorceress. Yusuke Shimura photographed in rapid succession a homeless person he encountered on the sidewalks of New York and exhibited the resultant photographs and video. He captured this subject, the likes of whom can be found in any city and whose presence has a magical quality that often invites gossip, as if photographing a stage actress, adding to the theatrical effect by shining a spotlight on each photograph in the exhibition. Shimura, who travels with ease to unfamiliar places, takes snippets of scenes of people he sees at a station, for example, in such a way that they become fabrications and rearranges them to create space times that are a mixture of fact and fiction. In his drawings, in which he depicts as universal values compositions that inspire the hopes and dreams of people everywhere, he experiments by presenting the same figure in multiple, searching as he does in





上) WITCH 2006 Cプリント C-print 86×130cm

下) 展示風景 Installation view

右) Magictime 2007 DVD





上左) たたずむ still 2008 ミクストメディア Mixed media サイズ可変 Dimensions variable

上右) 竹林しばき a bamboo-busting girl 2008 ビデオ Video 5分6秒 5'06"

下) みんなのお祝いの日 a Celebration day for all 2008 アクリル絵具、パネル Acrylic on panel 200X450cm



099

ヒョンギョン HYONGYON

ぞくぞく

awesome

2008.7.5 - 27

韓国出身のHyonGyonは、日本に留学し、母国の民族的な文化と自身の過去の記憶を意識するようになりました。彼女は今回の展示で、喜び、期待、恐怖、緊張、興奮をあらわす感覚、「ゾクゾク」を表現したかったと言います。カラフルな絵具でダイナミックに描かれた絵には、チマチョゴリを身につけ、髪を振り乱す女性が登場します。刃物や髪飾りが頭に突き刺さった彼女たちは、ドクロや現代のキッチュなグッズを身にまとい、女性の奥深くにある鬼気迫る思念と韓国の民族性、それと対極的なポップな可愛さを表しています。下着を着けた彼女自身が、森の中で包丁を振り回しながら、憑かれたように花や布と戯れる映像作品も発表されました。



Korean-born HyonGyon first started to think seriously about the traditional culture of her own country and her memories of her own past after coming to Japan to study. According to HyonGyon, with this exhibition she wanted to express the idea of *zoku-zoku*, a sensation that can indicate delight, anticipation, fear, nervousness, or excitement. Her paintings, which are done in a dynamic, colorful style, feature women wearing traditional Korean *chima-chogori*, their hair loose. These women, whose heads are pierced with various objects including swords and hair ornaments, are also adorned with skulls and a range of contemporary kitschy items, representing the grisly thoughts and Korean cultural identity deep in the minds of the women, but also a contrasting fashionable charm. The paintings were exhibited together with a video work in which a woman similar to those that appear in the paintings but wearing only an undergarment brandishes a knife while frolicking among flowers and fabric in a forest as if possessed.





上左) たたずむ still 2008 ミクストメディア Mixed media サイズ可変 Dimensions variable

上右) 竹林しばき a bamboo-busting girl 2008 ビデオ Video 5分6秒 5'06"

下) みんなのお祝いの日 a Celebration day for all 2008 アクリル絵具、パネル Acrylic on panel 200X450cm



高倉吉規

YOSHINORI TAKAKURA

THE GIFT

2008.7.5 - 27

街の中にうずまく人間の欲望のエネルギーが、絵画制作における大きなモチベーションであり、テーマなのだと高倉吉規は言います。それを彼は、色鮮やかな絵具を多重に使って、うごめくような有機的文様で展開します。まるで細胞分裂の過程を見るような、あるいは生き物の翼か鱗を見るような躍動感のある表現は、樹木が芽吹き、果実が実るイメージとも重なります。しかし、うねるような動的な抽象パターンは、ひとつの形態にとどまることなく、作品ごとに様々に変化していきます。それは、生命の胎動を現す、それ自体が原初のパワーを発する生きた絵画なのかもしれません。舞台芸術にも携わる高倉は、そんな熱を感じさせる新しい絵画の形を開拓し続けています。

According to Yoshinori Takakura, the energy of human desire that swirls around the city is an important motivation and theme for his paintings. He uses multiple layers of brightly colored paints, forming organic patterns that seem to wriggle across the canvas. Brimming with the kind of vigor that brings to mind watching cell division or the wings or scales of a living creature, his works also conjure up images of trees coming into leaf and fruit ripening. However, his twisting, dynamic, abstract patterns are not limited to a single form, but vary from piece to piece. One could almost describe Takakura's paintings as living things that show early signs of life, giving off a kind of primordial power. Takakura, who is also involved in theatrical art, continues to break ground in this new form of painting that never fails to impress with its passion.



上左) 展示風景 Installation view

上右) In the womb 2008

油彩、カンヴァス Oil on canvas 190×130cm

下) Caught by something 2008

油彩、カンヴァス Oil on canvas 130×190cm



U1

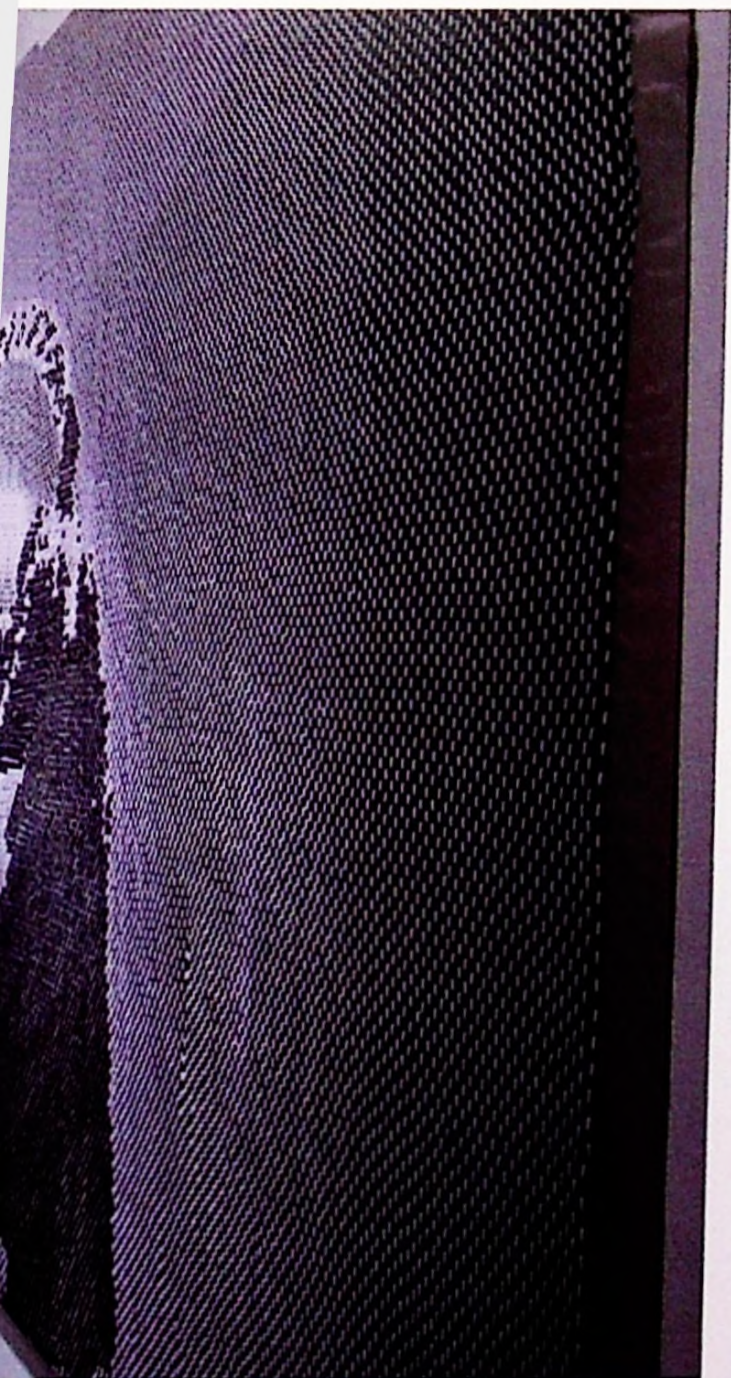
塩川直子 NAOKO SHIOKAWA

永遠の昔日
Eternal past days
2008.8.2 - 24

塩川直子は、既存の事物や見慣れたイメージに白黒のオプティカルな装飾を施し、そのモノ自体が感じさせる時間や記憶、意味について、観客に考えさせます。今回彼女が素材に選んだのは、彼女自身の記憶をとどめた、古い家族の思い出の写真。それらをモノクロにして大きく引き延ばし、布に印刷して、イメージの白い部分には黒いビーズを、白い部分には黒いビーズを縫いつけました。そうすることで、実際には触ることのできない個人的な記憶の世界が、いやがおうにも物質感のある現実として目の前に迫り、過去と現在の時間が渾然一体となって現れました。他者と記憶を共有する、写真でも絵画でもない、新しい表現が生まれました。

Naoko Shiokawa applies black and white optical embellishments to existing objects and familiar images, encouraging the viewer to think about the time, memory, and meaning inspired by the objects themselves. For this exhibition Shiokawa chose as her material a series of old family photographs that contain personal memories of the artist. She transformed these photographs into monochrome images, enlarged them, printed them on fabric, and sewed black beads onto the white parts and white beads onto the black parts. As a result, the artist's world of personal memories, something that we cannot actually touch, looms in front of us as something real with a heightened material presence, and past and present begin to merge. A new form of expression that is neither photography nor painting has been generated, one that enables us to share memories with others.





上) 20年前の家族 Family 20 years ago 2008

ビーズ、布 Beads on cloth 140×190cm

下左) 展示風景 Installation view

下右) 結婚2 Marriage 2 2008

ビーズ、布 Beads on cloth 110×80cm

青山裕企 YUKI AOYAMA

ソラリーマン・オリンピック 東京 2008
SOLARYMAN OLYMPIC TOKYO 2008

2008.8.2-24

青山裕企は、スーツ姿で宙に浮くサラリーマンを「空跳ぶサラリーマン=ソラリーマン」と名付け、写真展として発表しました。スーツ姿の記号化されたサラリーマンたちは、それぞれ好きなポーズで、カメラの前で跳んで見せます。日頃は神妙な様子であくせく働く彼らが、正義のヒーローのように自由に空を跳び、生き生きとした表情を見せる時、観客も一緒になって心の解放感と躍動感に満たされます。およそ150人もの被写体を撮影した同作品は、16点に絞って展示構成し、会期中には一般公募のワークショップ「ジャンプ撮影会」も実施しました。プロのカメラマンとしても活躍する青山は、他に女子高生を記号化して撮ったシリーズ等も発表しています。

Yuki Aoyama calls his company employees in suits suspended in midair "sky-bound salarymen," or "solarymen" (a play on the Japanese words for "air" and "company employees") for short. His iconic salarymen in suits leap in front of the camera, each adopting their favorite pose. At the sight of these businessmen, who usually toil away obediently, flying freely

...hermes with



102

青山裕企

YUKI AOYAMA

ソラリーマン・オリンピック 東京 2008

SOLARYMAN OLYMPIC TOKYO 2008

2008.8.2 - 24

青山裕企は、スーツ姿で宙に浮くサラリーマンを「空跳ぶサラリーマン=ソラリーマン」と名付け、写真展として発表しました。スーツ姿の記号化されたサラリーマンたちは、それぞれ好きなポーズで、カメラの前で跳んで見せます。日頃は神妙な様子であぐせく働く彼らが、正義のヒーローのように自由に空を跳び、生き生きとした表情を見せる時、観客も一緒になって心の解放感と躍動感に満たされます。およそ150人もの被写体を撮影した同作品は、16点に絞って展示構成し、会期中には一般公募のワークショップ「ジャンプ撮影会」も実施しました。プロのカメラマンとしても活躍する青山は、他に女子高生を記号化して撮ったシリーズ等も発表しています。

Yuki Aoyama calls his company employees in suits suspended in midair "sky-bound salarymen," or "solarymen" (a play on the Japanese words for "air" and "company employees") for short. His iconic salarymen in suits leap in front of the camera, each adopting their favorite pose. At the sight of these businessmen, who usually toil away obediently, flying freely through the air like superheroes with animated expressions on their faces, the viewer, too, finds themselves filled with a sense of freedom and energy. This project involved photographing some 150 subjects, 16 of which were selected for display at TWS-Emerging. A series of public workshops called Jump Photography Gatherings were also held to coincide with the exhibition. Aoyama, who works as a professional photographer, has also exhibited a series based on photographs of iconic high school girls.



左) SOLARYMAN -Shuhei Kimishima- 2008

インクジェット・プリント Inkjet print 103X72.8cm

右上) 撮影風景 Photo Shoot

右下) 展示風景 Installation view



黒川彰宣

AKINOBU KUROKAWA

偶然の作戦

operations for chance

2008.8.2 - 24

自分の部屋で、以前の探しものや見覚えのないものを発見したときのような奇妙な感覚を、黒川彰宣は「偶然、無意識に配置された読点」として注目します。そうした偶然の出来事を引き寄せるための仕掛けが彼の展示のテーマです。巨大なあみだくじ状の立体作品が壁に、机が溶解しているようなオブジェ、動き回る小さな毛ぼこりのような作品などが床に点在します。紐を使って制作した床の大きな立体は、騙し絵の顔が浮き出たような部分がくるくる回り、視野の一部がうねるような錯視体験を招きます。トリッキーで、謎めいた仕掛けは、意味ありげなゲームを仕掛けられているようで、時空をゆがめ、入口も出口もない迷路に観客を誘い込んでいきます。

Akinobu Kurokawa focuses on the peculiar sensation of finding in one's own room things one was previously looking for or things one does not remember, occurrences he refers to as "unintentional, unconsciously placed punctuation marks." The theme of his exhibition is contrivances designed to attract such chance occurrences. A three-dimensional piece in the shape of a giant Ghost Leg stands next to the wall, while an object that looks like a melting desk and works that resemble tiny moving balls of lint lie scattered on the floor. The large three-dimensional piece on the floor, made from rope, includes a section coiled in such a way that a trompe l'oeil face appears to emerge, giving rise to an optical illusion in which a part of one's field of vision seems to swirl around. These tricky, mysterious contrivances appear to be part of some meaningful game, distorting space-time and luring the audience into a maze with no entrance or exit.





上左) メクラチビゴミムス blindlittleduster 2008

フェイクファー、電子玩具 Fake fur, electronic toys

サイズ可変 Dimensions variable

上右) 展示風景 Installation view

下) ほどけさん untier 2008

キャンプロープ、シリコン、発泡スチロール、モーター

Camp rope, silicon, styrofoam, motor 260×199×39cm

104

吉田真由子

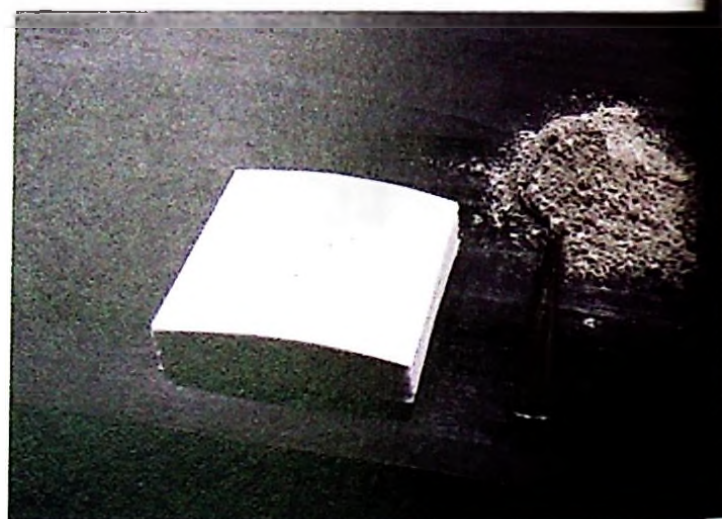
MAYUKO YOSHIDA

鬼し

Demoniac

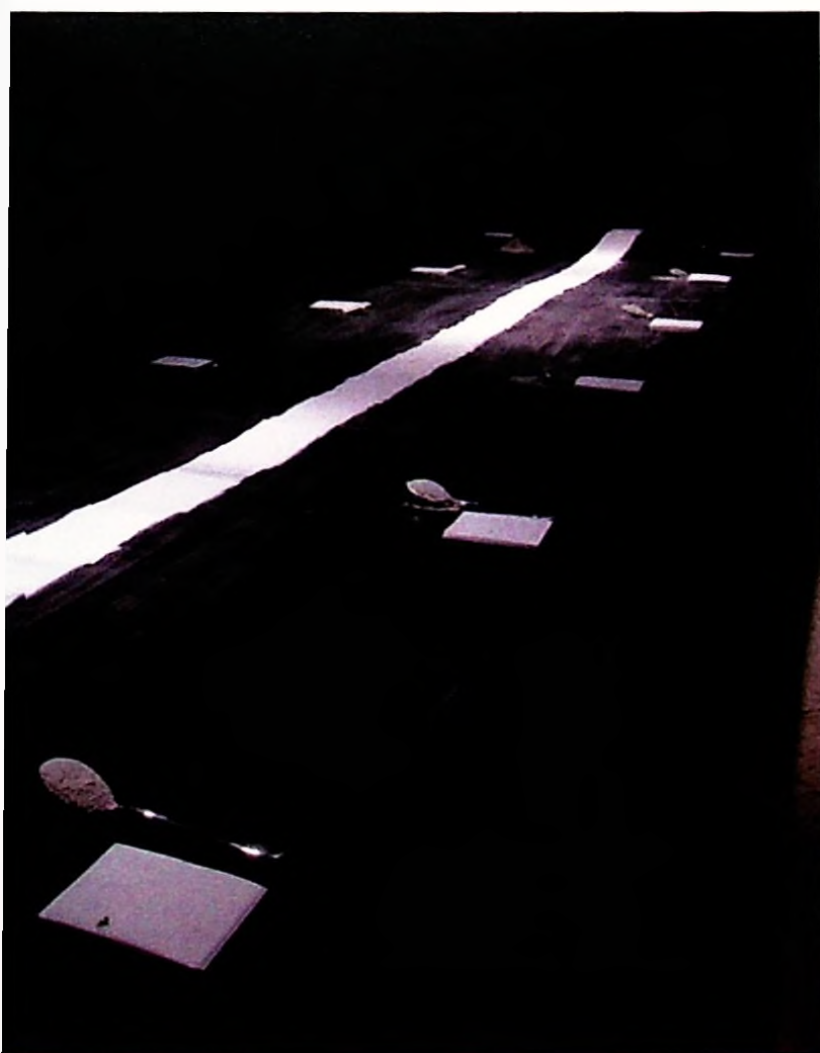
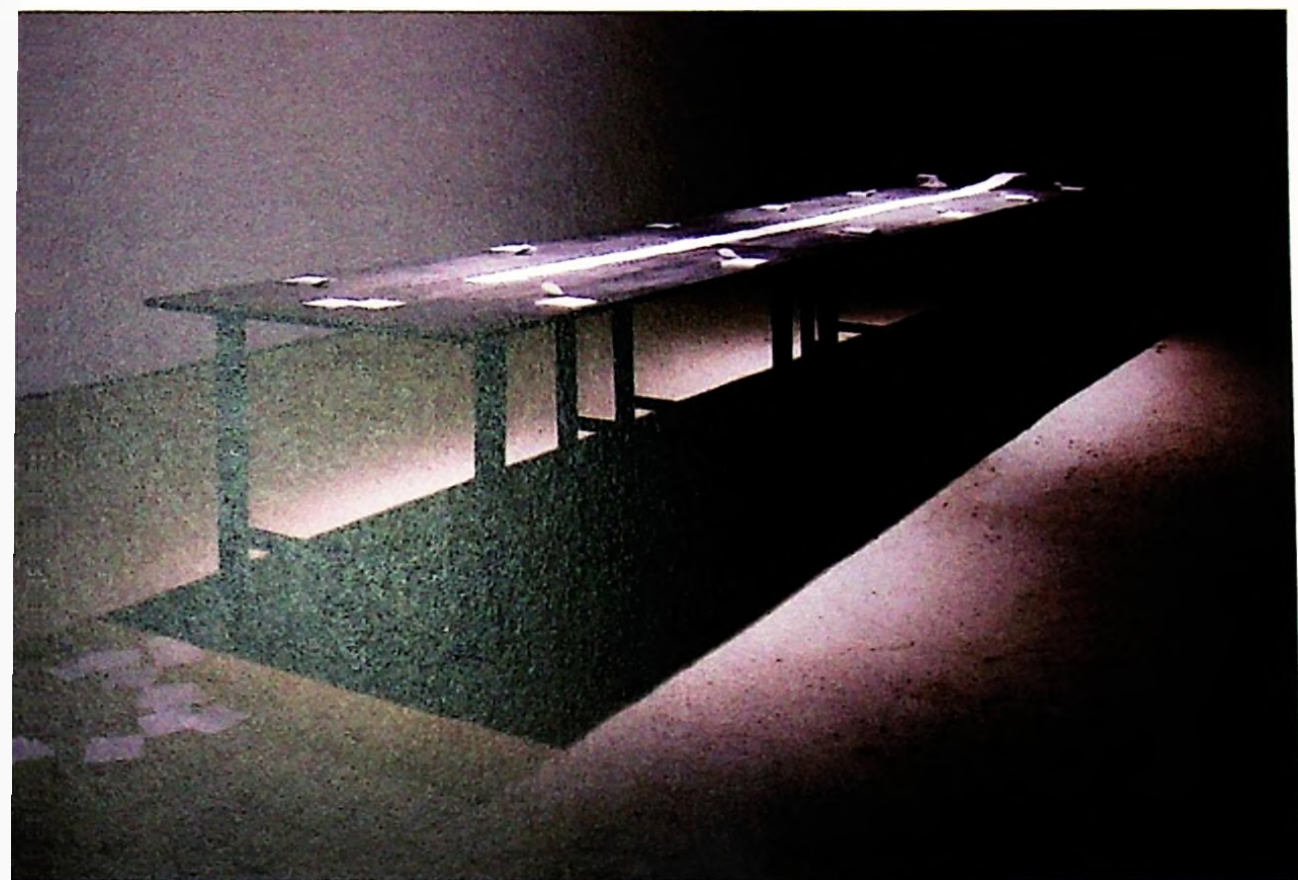
2008.8.30 - 9.21

パフォーミングアーツ出身の吉田にとって、言葉に対するデリケートな感覚は、作品の重要な要素です。言葉と言葉の間にあるもの、日々の生活の中で言葉を発した途端に消えてしまうものの意味を、彼女は問いかけます。今回の展示では、点字の紙とそれを燃やした灰を載せたスプーンを食卓にセットして、言葉ではなく行間をいただくような場をつくりました。点字という触る言葉は、さらにその一部が焼かれて穴となり、二重に読み取り不能な状態を表現しています。自分の中で言葉にならなかったものが堆積し、それらを一日の終わりに出すという循環の作業を経て生まれる作品は、すべてを言語化する西洋とは違う日本的感性があります。



For Mayuko Yoshida, who comes from a performing arts background, a delicate sensibility with respect to words is an important element in of her work. She questions the meaning of the things that lie between words, and the things that disappear the moment words are uttered in the context of everyday life. For this exhibition Yoshida placed on a dining table sheets of paper with messages in Braille along with spoons containing the ashes of similar sheets of paper, creating a place where one is presented not with words but with the space between lines. The Braille letters, which form words that can be read by touch, along with the holes where some of the letters have been burnt, represent a state that is unreadable on two levels. These works, born out of a cycle of accumulating all the things the artist was unable to put into words and releasing them at the end of each day, have a quintessentially Japanese sensibility that is different from that of the West, where everything is put into words.





展示風景 Installation view

桐、トレーシングペーパー、灰、既製品のスプーン

Paulownia wood, tracing paper, ash and ready-made spoons
540×94×80cm

105

江幡京子 KYOKO EBATA

ジャムの瓶詰め小屋

The Game Keeper's Jam Cellar

2008.8.30 - 9.21

江幡京子は、高齢者の生活空間に特別な美しさを見いだします。他人から見ると合理性を欠いていたとしても、その人が長年生活を積み重ねてきた中で生まれた、独自の日用品や家具の配置があるからです。これらの情景は、今の時代の風潮と重なり、かっこよく見える時があると同時に、未来の世界のようでもあると説明する江幡は、この写真シリーズの制作中に祖母が亡くなった時、目の前で祖母の持ち物が遺品へと意味が変化することに強く心を動かされたと言います。それぞれの空間には、独自の記憶、時間、身体性があり、本人不在であるからこそ、その人の空気感をより一層映し出します。江幡はその後、トーキョーワンダーサイトの二国間交流事業レジデンス交換プログラムでソウルのサムジースペースに3ヶ月間滞在し、韓国のお年寄りの生活空間を撮影しています。

Kyoko Ebata detects a peculiar beauty in the living spaces of the elderly. This is because, even though it may seem irrational to the outsider observer, each of these spaces has its own arrangement of daily necessities, furniture, and so on that is the result of the accumulated lifetime experience of the individual concerned. According to Ebata, who explains that these scenes occasionally correspond to current trends and appear fashionable while also resembling a world of the future, when her grandmother died while she was in the middle of creating this photographic series, she was deeply moved by the way her grandmother's possessions took on new meaning before her eyes as mementos. Each space has its own peculiar memories, time, and corporality, and the ambience of the occupant comes across even more strongly because they are absent. Ebata went on to spend three months at SSamzie Space in Seoul in conjunction with Tokyo Wonder Site's Bilateral Exchange Residency Program where she photographed the living spaces of Korean elderly people.



上左) 展示風景 Installation view

上右) ジャムの瓶詰め小屋 The Game Keeper's Jam Cellar
デジタル写真 Digital photography 150X110

下) ジャムの瓶詰め小屋 The Game Keeper's Jam Cellar
デジタル写真 Digital photography 112.5X



106

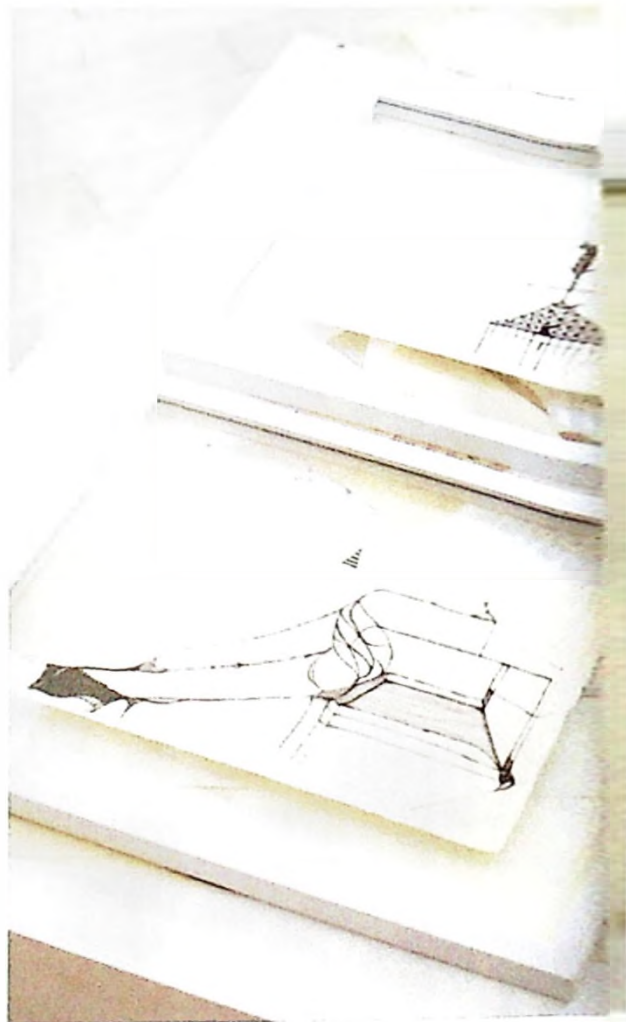
渋谷奈緒 NAO SHIBUYA

passage

2008.8.30 - 9.21

大学で写真を勉強し、広告やデザインの仕事を
した後にドイツへ渡った渋谷奈緒は、ライブチ
ヒを拠点に伝統的な書籍と文字のあり方につ
いて学び、和洋の素材と技術を融合したドロー
イング本を制作します。帰国した彼女は、日本の
和紙文化を再発見し、さらに素材としての紙に
ついて学びました。各地を点々と移動している
渋谷は、紙、印刷、コラージュ、本、写真とい
った多様なメディアで、自分自身が目にする景
色を再構成します。今回は糸とまち針を使って、
世界の様々な場所で人やものという点がつなが
り、やがてできた線の集合体がひとつの景色を
つくり上げる社会のプロセスについて考えまし
た。それらをドローイング表現として純化させ
たものが、展示された作品です。

Nao Shibuya, who studied photography at university and traveled to Germany after working in advertising and design, was based in Leipzig where she studied traditional publishing and lettering techniques and began creating drawing books that combine Japanese and Western materials and methods. After returning to Japan, she rediscovered this country's traditional paper culture and began learning more about paper as a material. Shibuya, who is constantly on the move, reconstructs scenes she has seen with her own eyes using various media including paper, printing, collage, books, and photography. On this occasion she turned her attention to the social processes whereby people and things in different places around the world interconnect, using thread and marking pins to represent these locations and connections. The mass of thread that eventually formed created a single landscape. The works she exhibited were a refinement of the results in the form of drawings.





上左) 上: 観測レーダー Observation radar 下: 距離 Distance
 上右) A bubble bird 2008 インク、紙 Ink on paper 70×100cm
 下) 展示風景 Installation view

107

日置智也

TOMOYA HIOKI

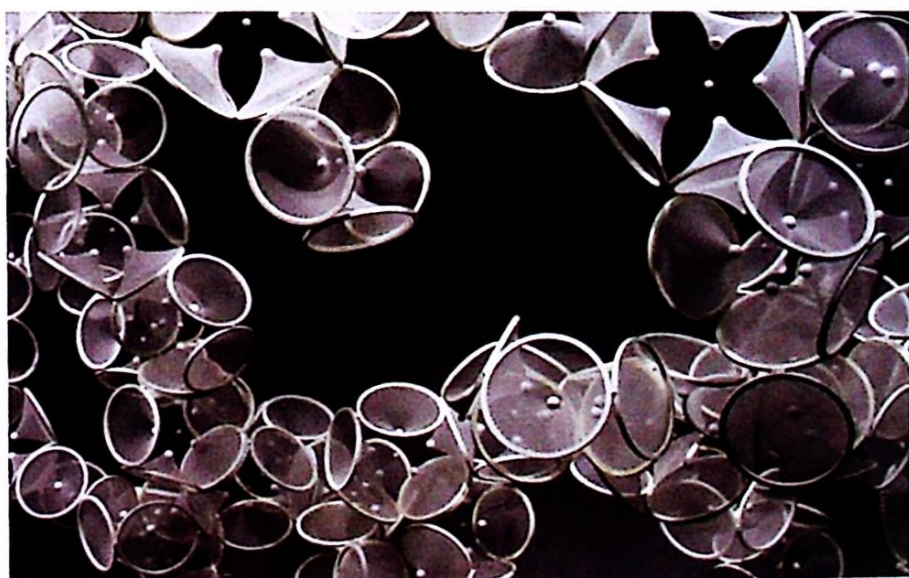
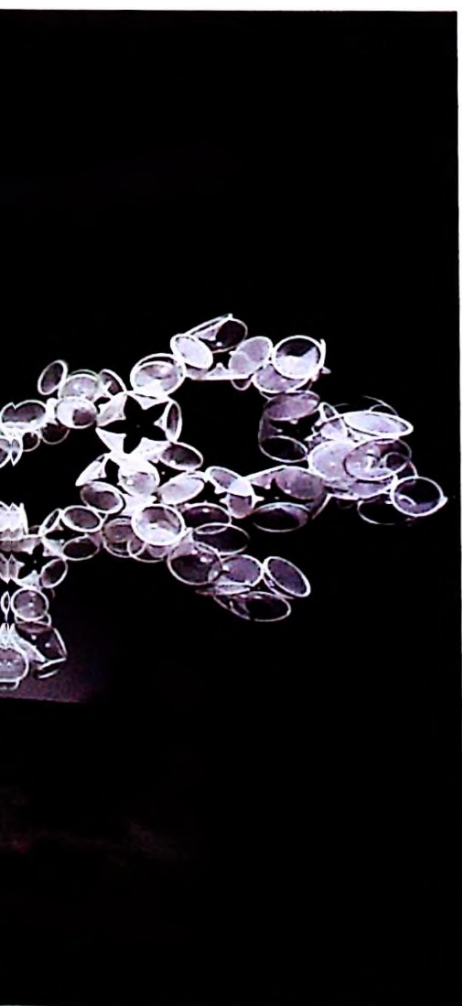
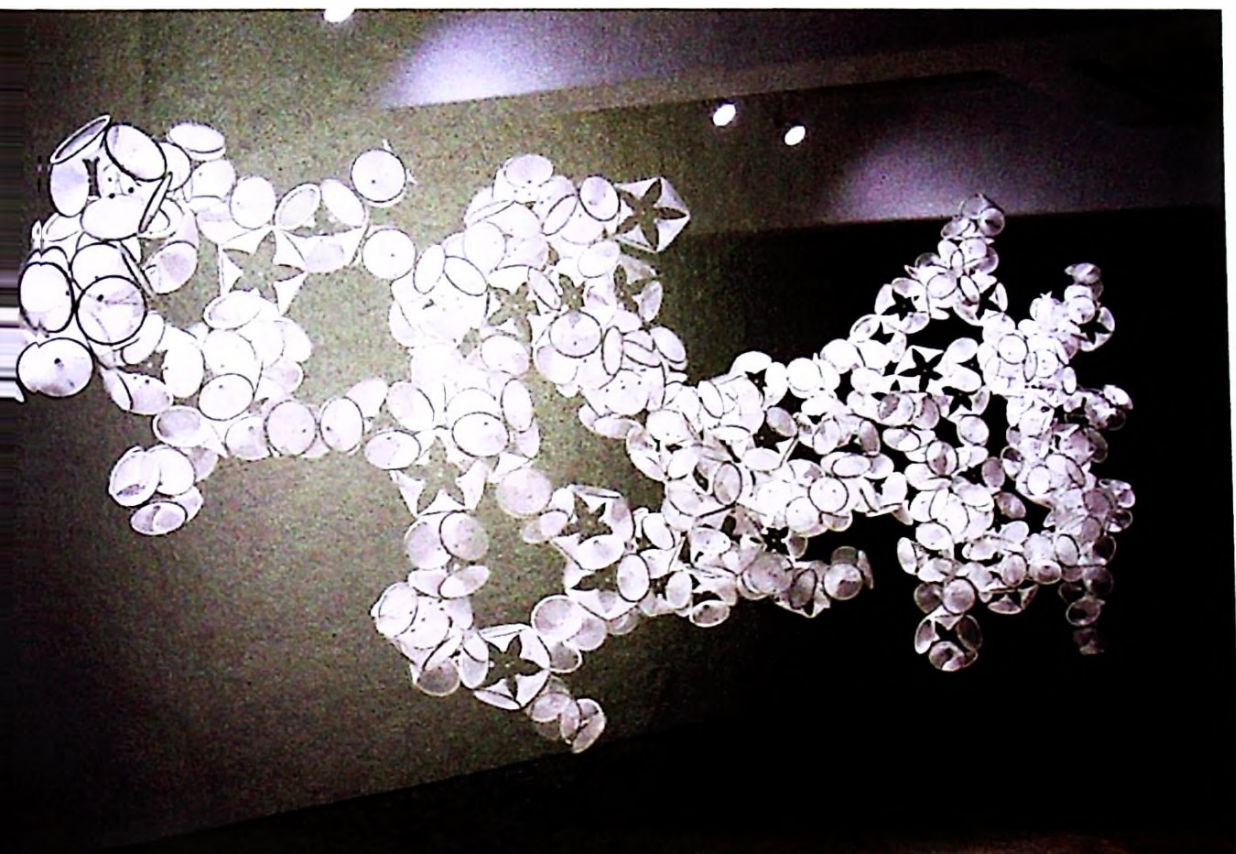
Internal Flower -continuity solids-

2008.9.27 - 10.19

日置智也は、「トーキョーワンダーウォール」の第1回立体部門の入賞作家です。今回の展示では、金属の枠と伸縮性のある布を使って制作したパーツを、会場で巧みに組み合わせて構成しました。照明を工夫することにより、光と影が織りなす、軽やかで美しい姿が立ち現れました。私たちが美しいと感じる自然の中の形や状態に注目する日置は、点や円、球、曲線などを作品に取り込みます。過去には木の葉を素材にしましたが、現在は人工素材を取り入れることにより、より作品は抽象性を増しています。布の張力によって緊張感を与えられた今回の作品は、花の集合のようでもあり、また細胞分裂や深海の静かな感覚などを思わせる多様な存在となりました。

Tomoya Hioki was the first artist to receive an award in the three-dimensional category of Tokyo Wonder Wall. For this exhibition he took parts created using metal framing and elastic fabric and skillfully assembled them at the venue. Through careful arrangement of the lighting, a series of graceful and beautiful forms combining light and shadow manifested themselves. Hioki, who focuses on forms in nature that people regard as beautiful, incorporates dots, circles, spheres, curves, and the like into his works. In the past he used leaves from trees as materials, but has recently started using manmade materials, as a result of which his work has become more abstract. The work he exhibited this time, which took on an air of tension due to the tensility of the fabric, almost resembled an assemblage of flowers, while at the same time taking on a multifarious presence that called to mind cell division or the quiet sensation associated with the depths of the ocean.





Internal Flower -continuity solids- 2008
 アルミ、布 Aluminum, cloth 300×700×200cm

石井弘和

HIROKAZU ISHII

超人、降臨。

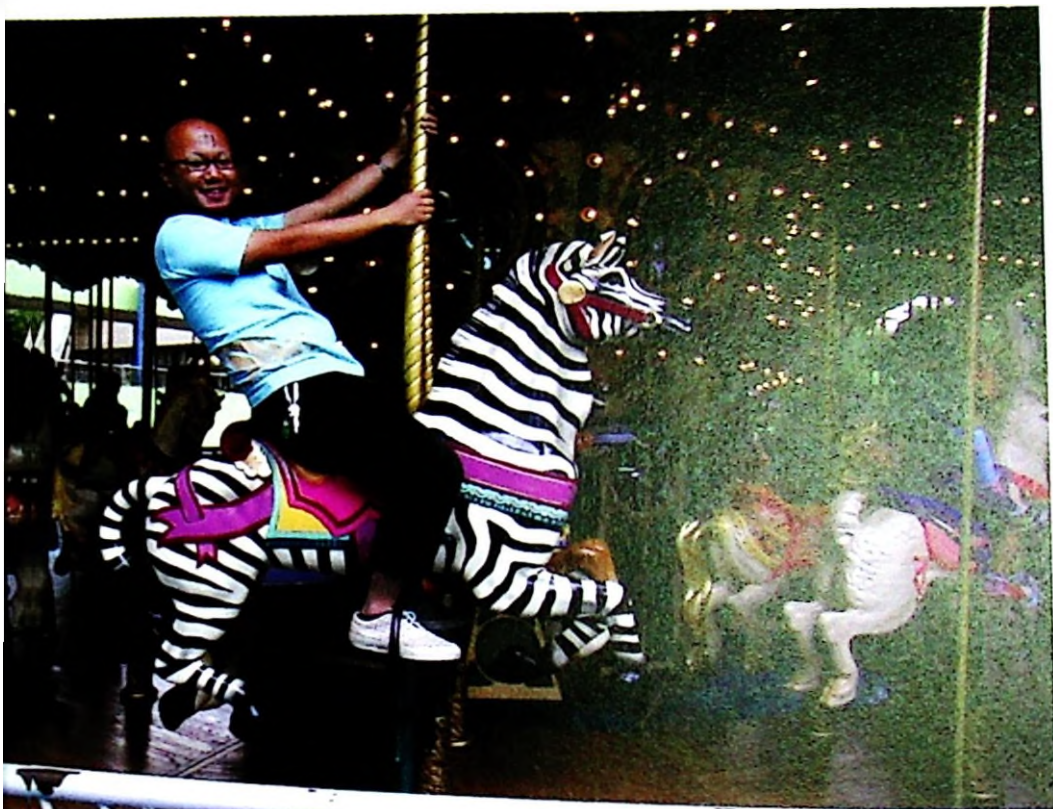
Advent of superman.

2008.9.27 - 10.19

美大受験の定番、石膏デッサンでおなじみの古典的な超人像に、現代の超人イメージを重ねて描いたのが、石井弘和の作品です。ブルータスやアグリッパといった過去の存在よりも、じつはアニメのヒーローにリアリティを感じるものの、フラットなアニメキャラは光と影による西洋式のモノクロ・デッサンではとらえきることができません。そんな東西の視覚認識と様式のズレを、石井はコミカルに戯画化し、現代における真の超人を召還してみせるのです。オープニングでは、コスプレをして後樂園遊園地に出向き、周囲のリアクションを記録した写真をスライド上映しました。

Hirokazu Ishii's works consist of plaster busts of classical heroes of the kind usually drawn as part of the entrance exams at art school over which have been superimposed images of modern-day Japanese superheroes. While he actually regards such animated heroes as more real than figures like Brutus and Agrippa from the past, he is unable to capture these flat cartoon characters using Western monochrome drawing techniques that rely on light and shadow. Instead, Ishii caricatures in comical fashion the gap between Western and Eastern optical awareness and styles, summoning and presenting real superheroes of the age in which we live. For the opening, Ishii showed slides of photographs recording people's reactions when he dressed up as one such hero and wandered around the Tokyo Dome City amusement park.





上)「超人、隣国。」番外編 "Advent of superman."extra 2008
パフォーマンス Performance
下左) 展示風景 Installation view
下右) ロビルス Robirs 2008 アクリル絵具、石膏像
Acrylic on plaster figure 75×70×35cm

109

笹田晋平

SHINPEI SASADA

法華経フォン・ド・ボー

Lotus Sutra – Fond de veau

2008.9.27 – 10.19

釈迦の涅槃図の釈迦（シャカ）をシャケに差し替えて翻案した、爆笑モノの珍作をひっさげて、笹田晋平は大胆な展示を展開しました。キャッチフレーズは、「絵でメシが一生食べますか?」。壁には高級霜降り牛を描いた大作や、鮭、塩をモチーフにした絵画がずらりと並びます。オープニングの日、笹田は一升(=一生)分のご飯を炊き、会場に置いたちゃぶ台で周囲の絵をおかずにご飯を食べ尽くしました。美術館や画廊の高尚で清潔な空間に人の生と直結した「食」を注入することで、小難しいコンセプチュアル・アートに異議申し立てをすることが彼の意図でした。ここには駄洒落で笑いを誘いながら、アートを日常に引き寄せる実験精神がみなぎっています。

Shinpei Sasada undertook a bold exhibition by bringing in an uproarious, unusual work based on traditional *nehanzu* paintings depicting the death of the historical Buddha in which the subject (*shaka* in Japanese) had been replaced with a salmon fillet (*shake* in Japanese). His catchphrase was, "Can you earn your bread from painting your entire life?" The gallery walls were lined with paintings including a masterpiece depicting a slab of fancy marbled beef as well as others with salmon and salt motifs. At the opening, Sasada cooked a *sho* of rice (the word *sho* can mean either a measure of rice or a lifetime depending on the Chinese character used) and ate it at a dining table placed in the middle of the gallery surrounded by his paintings, which represented the dishes that usually accompany rice. His aim





上) 左: 特選アカトラ AKATORA 2008

中央: 1280/100NO.3 2008

右: COMEBACK! SALMONSAND 2007

下左) 左: シャケ涅槃図 NO.3 Nirvana of salmon (shake) NO.3 2008 油彩、コラージュ、石膏地塗りしたカンヴァス Oil on canvas (gypsum ground), collage 145×145cm

右: 即席阿弥陀来迎 (安藤百福に捧ぐ) Instant Buddhism (Hommage to Momofuku Ando) 2008 油彩、石膏地塗りしたカンヴァス Oil on canvas (gypsum ground) 162×162cm

下右) パフォーマンス風景 Performance view



CHIHIRO NAGASHIMA

The Stranger

2008.10.25 - 11.16

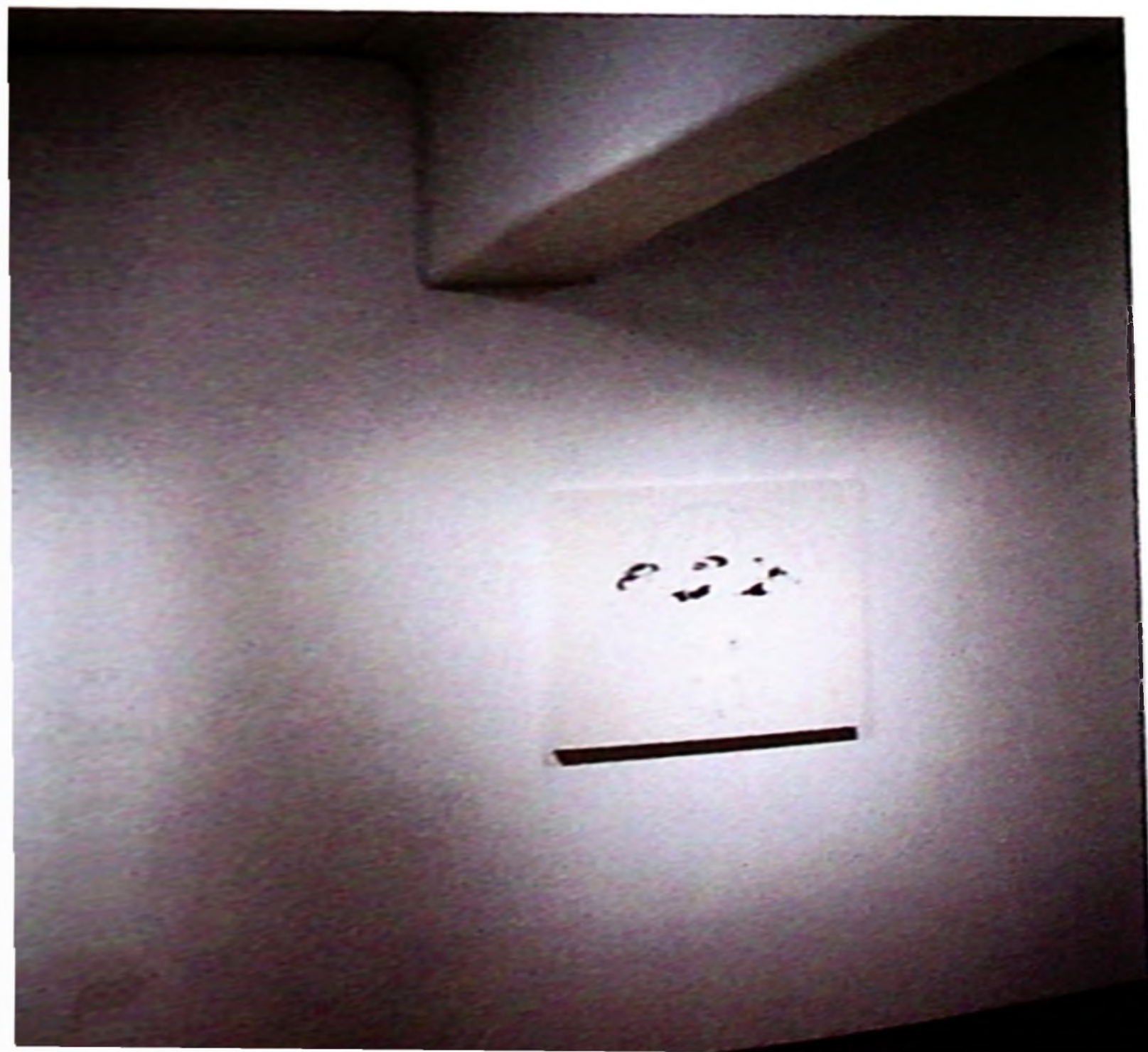
どこにでもあって、どこでもない場所の、だれでもあって、だれでもない人びとを、永島千裕は描きます。展示会のタイトルは、異邦人の意味。フラットな画面には一見ファンタジックでポップな世界が広がりますが、細部を見れば残酷な場面が点在し、ボッシュの地獄図を思わせるグロテスクさがそこそこに顔を出します。かぼそい身体をした人々にまじってヒーロー的な存在もいれば、青い羊もいます。羊は、聖書における弱き人間の比喩です。自分の生きる日常と世界の成り立ちを俯瞰する両方の視点から、彼女は場所や時間、意味や思考が入り交じる混沌の大地を見せようとしています。「トーキョーワンダーウォール2007」大賞受賞者です。

Chihiro Nagashima depicts the kinds of people who could be anybody but are nobody in the kinds of places that could be anywhere but are nowhere. On flat surfaces, worlds that at a glance appear fantastic or pop-inspired unfold, but on closer inspection one sees they are interspersed with cruel scenes, with a grotesqueness reminiscent of Bosch's depictions of hell visible in places. Heroic figures can be seen among figures with scrawny bodies, as well as blue sheep. The sheep are metaphors for the meek referred to in the Bible. Nagashima wants to present from both the perspective of the everyday life she lives and that of someone looking down on the world from above a land of chaos in which different places, times, meanings, and thoughts intermingle. Winner of the Tokyo Wonder Wall 2007 Award.





上左) 君は動く城 You are the moving castle 2008
 アクリル絵具、紙 Acrylic on paper 51.5×36.5cm
 上右) ポセイドンの娘たち Daughters of Poseidon 2008
 アクリル絵具、紙 Acrylic on paper 112.2×145.8cm
 下) 展示風景 Installation view



伊藤雅恵 MASAE ITOH

MIXING IN

2008.10.25 - 11.16

花をモチーフにそのときどきの自分の感情や経験、心に残る情景を表現して、見る側とある種の共有をはかろうとしてきた伊藤雅恵の絵は、今回の個展で大きな変化を遂げました。日常のなにげない情景を透かし見るように、風に舞い散る花びらのようなものや鮮やかな色彩の斑点が画面を覆い、景色を見通す空間感覚が鮮明だった以前の作風は、より抽象性を増しはじめました。画面から溢れ出そうな空気感はそのままだ、色や形がはじけて、ダイナミックな抽象画が生まれたのです。彼女はそうしたありように、制作を取り巻く様々なものたちが渾然一体と作品になっていくような感覚を重ねています。溶け合い、見えにくくなった具体的な素材にかわって、絵の中でしか生まれない新しいものを見せようとしています。

The paintings of Masae Itoh, who to date has worked on establishing a kind of communion with her audience by expressing her own emotions and experiences and the scenes that are vivid in her memory using flowers as a motif, underwent a radical shift with this exhibition. Her style, which saw her canvases covered with what looked like petals fluttering down in a breeze or brightly colored spots and in which there was a distinct sense of space affording one an unobstructed view of the landscape, as if one were peering into innocent scenes of everyday life, has become far more abstract. The ambience that seems to pour out of the canvas is the same, but for the first time the colors and shapes burst open to create dynamic abstract work. Itoh has sought to add to this a sense of the various things surrounding the creative process forming a harmonious whole and becoming the work. It is as if in place of the actual materials, which have blended together and become difficult to make out, she is trying to present something new that can only come into existence in her paintings.



伊藤雅恵 MASAE ITOH

MIXING IN

2008.10.25 - 11.16

花をモチーフにそのときどきの自分の感情や経験、心に残る情景を表現して、見る側とある種の共有をはかろうとしてきた伊藤雅恵の絵は、今回の個展で大きな変化を遂げました。日常のなにげない情景を透かし見るように、風に舞い散る花びらのようなものや鮮やかな色彩の斑点が画面を覆い、景色を見通す空間感覚が鮮明だった以前の作風は、より抽象性を増しはじめました。画面から溢れ出そうな空気感はそのままだ、色や形がはじけて、ダイナミックな抽象画が生まれたのです。彼女はそうしたありように、制作を取り巻く様々なものたちが渾然一体と作品になっていくような感覚を重ねています。溶け合い、見えにくくなった具体的な素材にかわって、絵の中でしか生まれない新しいものを見せようとしています。

The paintings of Masae Itoh, who to date has worked on establishing a kind of communion with her audience by expressing her own emotions and experiences and the scenes that are vivid in her memory using flowers as a motif, underwent a radical shift with this exhibition. Her style, which saw her canvases covered with what looked like petals fluttering down in a breeze or brightly colored spots and in which there was a distinct sense of space affording one an unobstructed view of the landscape, as if one were peering into innocent scenes of everyday life, has become far more abstract. The ambience that seems to pour out of the canvas is the same, but for the first time the colors and shapes burst open to create dynamic abstract work. Itoh has sought to add to this a sense of the various things surrounding the creative process forming a harmonious whole and becoming the work. It is as if in place of the actual materials, which have blended together and become difficult to make out, she is trying to present something new that can only come into existence in her paintings.





上左) 向こうを見たい I want to see over there 2008 Oil on canvas 130×130cm
 上右) 目をとじてください Please close your eyes 2008 油彩、カンヴァス Oil on canvas 91×91cm
 下) 展示風景 Installation view



上左) 向こうを見たい I want to see over there 2008 Oil on canvas 130×130cm
 上右) 目をとじてください Please close your eyes 2008 油彩、カンヴァス Oil on canvas 91×91cm
 下) 展示風景 Installation view

13

野田和宏

KAZUHIRO NODA

物・発動

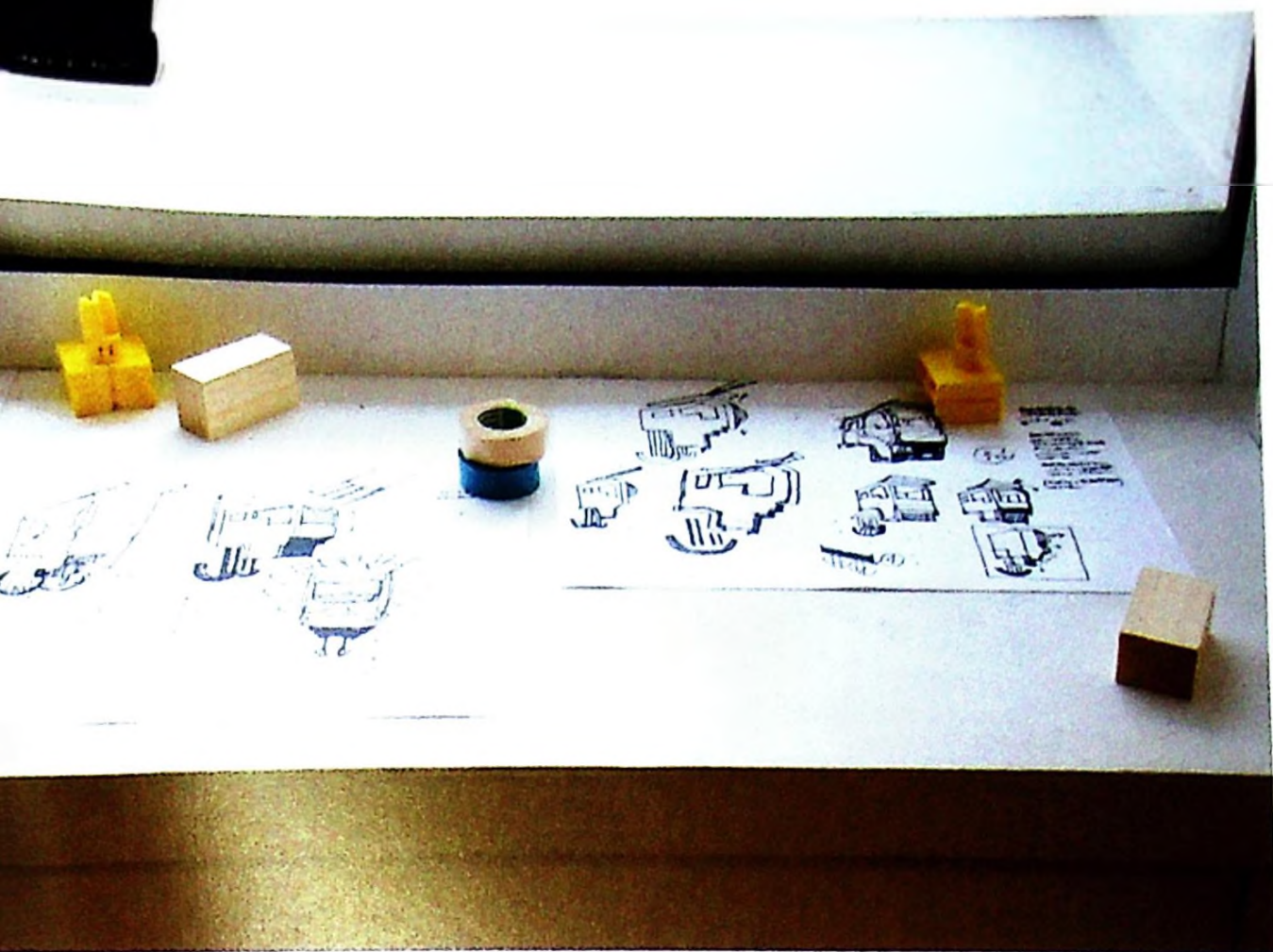
object・motion

2009.2.14 - 3.8

もともと美大で絵画を専攻していた野田は、空間にドローイングをしていくように、即興的な方法で立体作品をつくり上げていきます。重たそうなのに軽かったり、動かないはずのものが動いて見えることを意識した作品は、ダイナミックに木を組み合わせてしっかり構築されているようで、じつは数点の支点によって床から数ミリのところで浮かび、また扇風機の風でゆらりゆらりと宙を漂っています。観客はその様子をドキドキしながら眺め、緊張感と楽しさを同時に味わうことになります。建築家のように構造ありきの設計はせず、現場で制作するのが彼の信条です。重力に逆らい、安定と不安定の狭間の次元を実現する、自由でユーモラスな立体表現です。

Kazuhiro Noda, who majored in painting at art school, creates three-dimensional works using an improvisational method as if drawing in space. His works, in which things that appear heavy are actually light, and things that seem like they ought not to move look like they are moving, appear to be built solidly from the ground up from bits of wood, but are actually suspended from a number of fulcra and float several millimeters above the floor and gently sway in the breeze from an electric fan. The audience views the works nervously, experiencing simultaneously a sense of tension and enjoyment. It is an article of Noda's creed that he does not come up with designs like an architect but builds his structures on the spot. The result is a free and humorous three-dimensional form of expression that defies gravity and realizes a new dimension between stability and instability.





展示風景 Installation view

木材、段ボール、ビニール、ホース、扇風機、三脚、紐、針金
Lumber, cardboard, vinyl, hose, electric fan, tripod and wire

真坂亮平 RYOHEI MASAKA

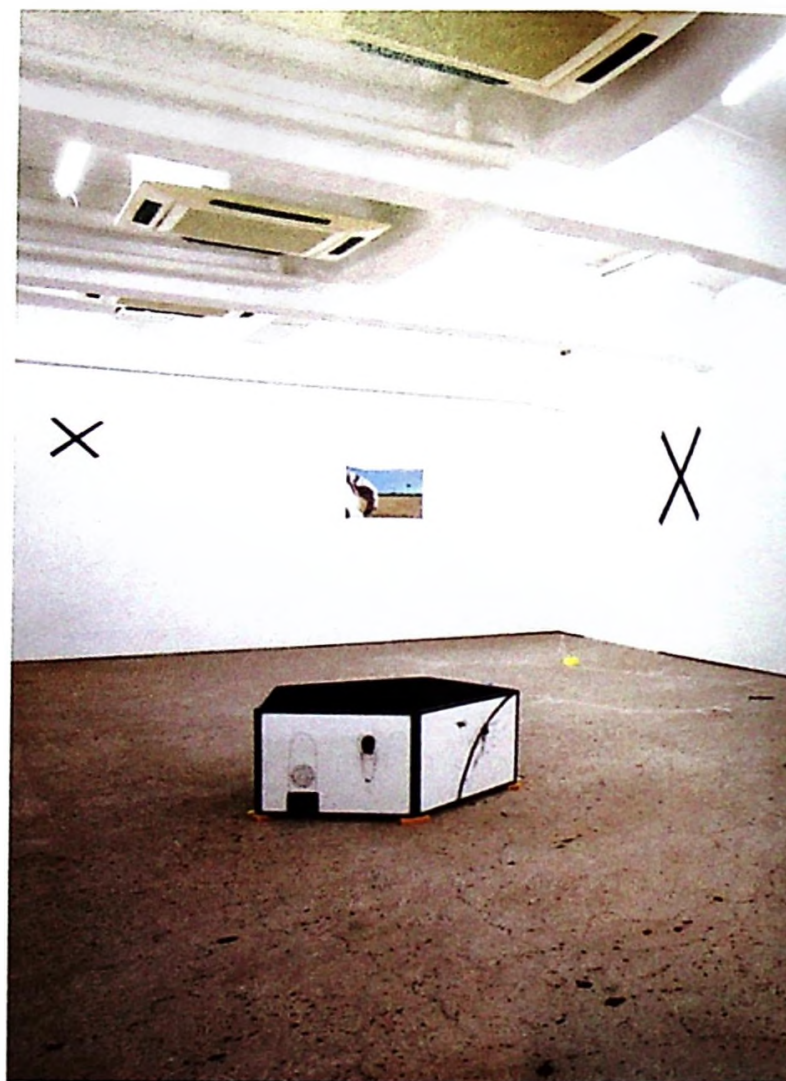
オニガワラウ

The laughter is heard from a black bubble

2009.2.14 - 3.8

「現実はいつも理解の範疇を超えてしまうが、空想はそれを補い、無理にでも意味を与えてくれるものである」と語る真坂亮平は、現実と想像の狭間の存在に注目します。今回の展覧会では、空想の産物でありながら現実世界では悪や恐怖のシンボルである「鬼」を取り上げ、その立ち位置を浮かび上がらせようとしてしました。魅惑的な粘土の立体やドロ잉、床には鬼の金棒をチェーンで展示し、空間全体をインスタレーションしました。彼は、壊れた傘や写真を使って想像の風を起こし、歯ブラシやタバコといった日用品を配することで、空想の世界を現実に取り寄せます。物事の両義的な側面を見渡す視点を、観客に軽やかに体験させてくれる作品です。

Ryohei Masaka, who says, "Reality is always beyond the category of understanding, but fantasy always makes up for it and helps give it meaning however irrational," focuses on things that exist in the realm between reality and fantasy. At this exhibition he took up the subject of "demons," which although a product of the imagination symbolize evil and fear in the real world, attempting to shed light on their role in society. The entire space was transformed into an installation, with fascinating three-dimensional works made from clay, drawings, and a demon's iron club depicted with a chain on the floor. Masaka generated an imaginary wind using such things as a broken umbrella and photographs, and by placing everyday items such as a toothbrush and cigarettes around the room managed to draw the world of fantasy closer to reality. His work enables the audience to experience playfully his own viewpoint from which he surveys the ambiguity of things.





展示風景 Installation view

粘土、プラスチックチェーン、ビニールテープ、フレーム、
ドローイング、写真、その他

Clay, plastic chain, vinyl tapes, frame, drawings and
photographs etc.

15

増子博子

HIROKO MASUKO

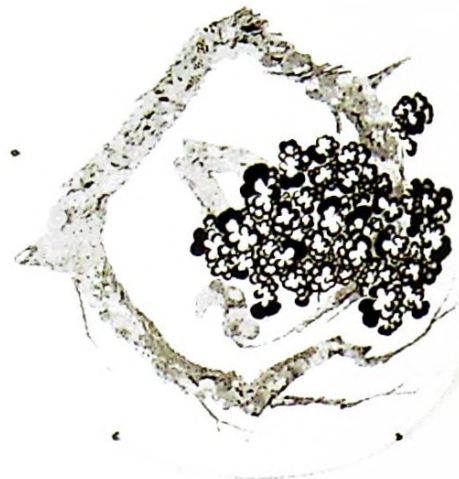
行為の庭

The garden of my act

2009.2.14 - 3.8

増子博子の盆栽に想を得たシリーズ「bonsai」は、外へと拡張していくような強い生命力を感じさせるものです。生き物が増殖していくように、彼女は最初に絵のアイデアである種を描き、画面に配置します。そして時間とともにそれらを成長させていきます。ビデオ屋でのアルバイトの休憩中にその種を描くことも多いと言い、育まれた画面にはやがて、野性的なパワーが宿っていきます。今回の展覧会では、人間の行為の痕跡を庭に見立てた「盆栽の庭」と、その内側に広がる世界を表した「冒険の庭」の2つの展示空間で構成されています。

Hiroko Masuko's series *bonsai*, the concept for which came from actual bonsai, evokes an image of a strong vital force extending outwards. In the same way that living things reproduce, Masuko begins by drawing seeds representing the ideas for her paintings and arranges them on her canvas. She then grows them gradually over time. According to Masuko she often draws these seeds during breaks in her part-time job at a video rental store. The paintings that emerge eventually take on a wild power. Her exhibition was made up of two separate display spaces, one a "bonsai garden" in which the evidence of human activity is compared to a garden, and the other an "adventure garden" representing the world on the inside.





上左) 来襲の窓 The window of the
attack 2008 ペン、インク、紙
Pen and ink on paper φ90cm
上右) 山 mountain 2007-2008
ペン、インク、紙 Pen and ink on
paper 112×165cm
下) 展示風景 Installation view

—東京の感性の最前線

今村有策(トーキョーワンダーサイト館長、東京都参与)

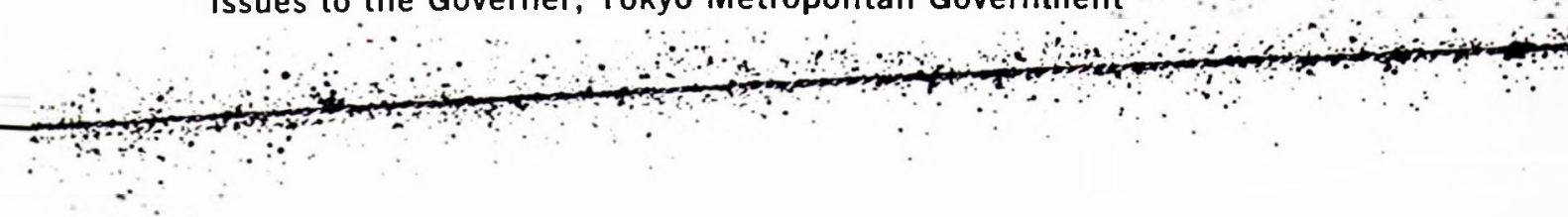
東京みたいなメトロポリスには、もっともっと若いアーティストやクリエイターがプロジェクトを展開している場所があつていい。しかし、残念ながら実情は違う。欧米各国と比べて支援が薄いという話は聞き飽きた感があるが、実はアーティスト側から、イニシアティブやコレクティブもどんどんできてくるといった状況ともちょっと違う。なぜだろうと思う。アジアのアートマーケットのバブルよりちょっと前に、トーキョーワンダーサイト(TWS)は若手アーティストの発表の機会をもっと増やそうと活動を開始した。東京には空き地が少なくなった。そんな空き地こそが大切なんだ、空き地みたいな、なんでもできる場所であってほしいと思った。だから、TWSはいろいろなことができるワンダーの場所であってほしい。そこから面白いことが生まれればいい。

同じ頃、アジアでは、どんどんオルタナティブなスペースが生まれ、古い体制の美術館や、これまでの画廊が果たせてこられなかった、世界と直結する活動を展開し始めていた。行政もそのような活動の重要性を認識し、それまでの文化政策を転換して、オルタナティブな活動を支援していった。そうして、小さなスペースは世界的な拠点となり、アジア各国の拠点となっていく。TWSも同じ機能を担うべく、世界のネットワークの創造発信拠点として活動を展開していった。同時に東京都も文化政策として、創造発信する都市・東京を目指し始めた。2007年には東京芸術文化評議会という文化政策の作戦会議をつくり、新たな芸術文化振興の基盤を再編成しようと試みている。

創造性あふれる感性、それはすべての活動の源だ。TWSは、東京がそのような感性が存分に活躍できる豊かな街になってもらいたいと考えている。TWSは、東京都の文化政策の前線基地であり、実験場として活動してきた。その最前線が「TWS-Emerging」だ。若いアーティストたちの本格的な展覧会デビューの場所として、東京の感性をはぐくむ砦のひとつだと思って、活動を続けている。そう、アートは趣味や余技じゃあない。生きてゆくため、世界を見つめるために、なくてはならないものなんだから。

Empty lot - frontline for creativity

YUSAKU IMAMURA Director, Tokyo Wonder Site / Counselor on Special Issues to the Governor, Tokyo Metropolitan Government



In a metropolis like Tokyo, there ought to be more places where emerging artists and creators develop their own projects. Unfortunately, however, this isn't the case. I get the impression people are tired of hearing how support is minimal compared to countries in the West, but the fact is neither are we really seeing a situation in which artists themselves are generating different initiatives and collectives. Just before the emergence of the Asian art market bubble, Tokyo Wonder Site (TWS) commenced activities with the aim of offering emerging artists more opportunities to show their work. There weren't many empty spaces in Tokyo. It's these empty spaces that are valuable, we thought. We want to locate ourselves somewhere like these empty spaces where we can do anything we like. Which is why we were happy to see TWS turn into a place of wonder where we could do all kinds of things. Happy that it was a place where interesting things could emerge.

Around the same time, in Asia alternative spaces began to spring up everywhere and began to conduct activities linked directly to what was happening in the rest of the world, something the old system in the form of art museums and the kinds of galleries that had existed until then couldn't achieve. Governments, too, recognized the importance of these activities and switched their existing cultural policies to policies that supported alternative initiatives. In this way, small spaces turned into global hubs, and hubs serving various Asian countries. In an effort to take on a similar function, TWS also developed programs aimed at becoming a creative hub in this global network. At the same time, the Tokyo metropolitan government adopted a cultural policy that would see it begin working towards establishing the city as a hub for the creation and transmission of art and culture. In 2007 it established the Tokyo Council for the Arts, a cultural policy "council of war," as it were, as part of an ongoing effort aimed at establishing new infrastructure for the promotion of art and culture.

A sensibility overflowing with creativity. This is the source of all activity. TWS wants Tokyo to become a vibrant city in which such a sensibility can be given full play. It has served as a forward base and a proving ground for Tokyo's cultural policy. And TWS-Emerging is the frontline in this campaign. I like to think of it as a stronghold nurturing the sensibilities of Tokyo by providing emerging artists with a place to hold their first real exhibition. That's right, art is not a pastime or a hobby. Because it's something that's essential for living, and for looking closely at the world.

表現のリアリティを希求する 行為の軌跡

天野太郎 (横浜美術館 主席学芸員)

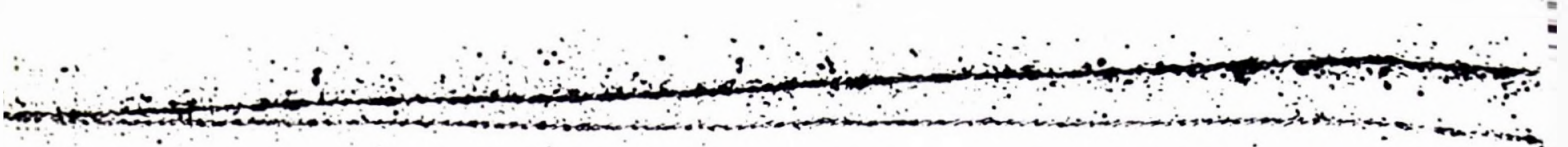
芸術の原理は、現在の美術を語るための美学的言説の見直し、再構築がはじまろうとしている。と言うよりも、批評の原理自体に筋道がなくなり、これまでのモダニズムの様々な言説を無批判に宙づりにしたまま今日に至ってしまったことの離離が、顕著になり始めている、と言うべきかもしれない。一方、制作活動についてはどうだろうか。様式の誕生は、直前の様式への批判的態度によって生まれる。現代の芸術活動は、こうした批判の対象が見当たらず、手探りで暗闇の洞窟を徘徊しているかのごとき状況が続いている。表現者は、自らの表現の原初について、せいぜいのところ美術史的追体験をするしかない。とは言え、こうした状況にあって、表現者と批評の側との根本的な違いは、この手探りの行為が、やがて光を獲得する外界への脱出を必ずしも意味せず、むしろ、彼らがこの暗闇の中の手探りそのものに表現の可能性を見いだそうとしている点だ。

「TWS-Emerging」の作家の中から何人が、将来目覚ましい活躍をするのかといった予見を示すことがここでの目的でないとすれば、彼ら彼女らの行為に美術の現況を少しでも読みとることのほうが肝要かもしれない。石井弘和の古典的美の原理への回帰を示すユーモラスなステートメントとアグリッパへのオマージュの作品を一笑に付すわけにいかないのも、トレンドといった外的要因が表現を担保するのではなく、内的意欲が表現を掻き立てるといった、ナイーブではあるが否定しがたい真理をここでは端的に示しているからだ。あるいは、油彩、アクリル絵具、水彩、植物水彩といった方法はもとより、コラージュ、ガリ版、シルクスクリーン、アニメーション、写真、デジタルメディア、ヒモを結び繋げる方法、刺しゅう、紙・印刷物の繊維を使った点描・線描を展開する渋谷奈緒の表現メディアへの様々な試みは、まさに表現のリアリティを希求する姿にほかならない。インスタレーションが、空間への異化作用として生まれ、ある種の環境を再現してみせる手法になった今、野田和宏は、表現の行為の痕跡を示す。同時に、反復する動きを加えることで、自己言及的でありながら何かに帰結するのではない行為の意味を宙づりにしようとしている。

こうした「TWS-Emerging」の試み、つまり、特定の表現メディアに特化して選抜するのではなく、あくまでも懸命にその表現をめぐるリアリティを求めてやまない行為を軸に作家を招聘し、表現の機会を提供することにこそ、これからの美術の方向性が垣間見られるような気がしてならない。

Trajectories of yearning for the reality of expression

TARO AMANO Curator in Chief, Yokohama Museum of Art



The principles of art are starting to show the effects of a reconsideration and restructuring of artistic discourse for the purposes of discussing present-day art. Or perhaps it would be more accurate to say that the contradiction in which the principles of criticism have themselves become devoid of reason, leaving the various discourses of modernism that have existed up until now hanging in the air uncritically, is starting to become obvious. But what effect is this having on creative activities? New forms emerge as a result of a critical attitude to forms that existed in the immediate past. Such objects of criticism are nowhere to be found among artistic activities today, and the situation remains one in which artists seem to be groping their way around in a dark cave. When it comes to the origins of their own expression, the best artists can do is undergo a kind of art-historical vicarious experience. That said, the fundamental difference between artists and critics in such circumstances is that for the former this act of groping around does not necessarily imply an escape into the outside world where they can obtain light, but rather that they are seeking to discover in the very act of groping around in the dark possibilities for artistic expression.

If the aim here is not to offer predictions as to how many of the TWS-Emerging artists will go on to achieve remarkable things in the future, then it is perhaps all the more important to read in their actions even just a little of the present situation with regard to art. Likewise, we cannot laugh off Hirokazu Ishii's humorous statements signaling a return to the principles of classical beauty and the homage to Agrippa evident in his work because here they demonstrate clearly the naïve yet difficult to deny truth that expression is not guaranteed by trends and other external factors, but rather awakened by internal desire. Then there are the experiments with various media by Nao Shibuya, who started out using methods such as oil painting, acrylic, watercolor, and vegetable dye watercolor, and later expanded into collage, mimeograph, silk screening, animation, photography, digital media, tied thread, embroidery, and stippling/line drawing on paper/printed-matter fiber, which indicate none other than a longing for reality of expression. Today, when installations are born out of the defamiliarization of space and have turned into a method for presenting recreations of certain kinds of environments, Kazuhiro Noda shows signs of genuine acts of expression. At the same time, by adding repetitious movement to the mix, he is attempting to leave hanging in the air the meaning of actions that, while self-referential, show signs of arriving at something.

I cannot help feel that it is precisely such initiatives as TWS-Emerging, that is to say, initiatives in which artists are invited and offered opportunities to express themselves based on actions that represent an earnest and untiring yearning for the reality of expression, rather than those in which artists are picked out on the basis of specialization in a particular expressive medium, that will give us a glimpse of the future direction of art.

初心忘るべからず!

宮村周子(編集者)

一年前のアートフェアの盛り上がりぶりが信じられないくらいに、金融危機以降、アート界でも、明るくない話題がずっとつきつぎ耳にとびこんでくるようになった。けれど、そもそも、ここしばらくの現代アートのバブル自体が空前の出来事だったわけで、バブルがはじけて画家が絵筆を折るか?という、そんなことはあるはずがない。新しい才能発掘の場として注目される卒業制作展や若手コンペ展、村上隆が主催する「GEISAI」などを訪れてみると、逆境を糧に、虎視眈々とつくり続けている人は、やはり際だって見える。売れ筋を意識するあまり表層的なスタイルに終始したり、ギャラリーへの所属に気をとられるあまり制作が失速してしまう、浮かれたムードは沈静化し、今後は力のあるアーティストだけが、図太く生き残っていくのだろう。

そんな激動の時期に、2008年度の「TWS-Emerging」は例年どおり開催された。会場で作品が購入できる特異な若手コンペ、「ワンダーシード」展の活況とも連動し、「TWS-Emerging」は、ディーラーとコレクター陣をも惹きつける、魅力的な若手作家展として定着してきた。アーティストを目指す層が底上げされている現在、相応の発表の場を確保するのはたやすくはない。広いスペースを自由に使い、スタッフのプロの指導とサポートを得られる「TWS-Emerging」は、展覧会開催の経験が積める貴重な場として機能している。

そうしたなかで、全体から感じられるのは、いい意味での独自路線のバラバラ感だった。絵画中心に始まった「トーキョーワンダーウォール(TWW)」と連携する同企画も、TWW立体部門のスタートや表現のマルチメディア化によって、写真や映像あり、インスタレーションありと、じつに多様な展開を見せている。青山裕企、江幡京子らの、コンセプトを吟味した写真のプロジェクトは完成度の高い力作で、その時その場の即興性を重視した野田和宏の立体ドローイングは、代替不可能な緊張感を湛えて、展覧会を見に行く面白さを思い出させてくれた。

一方で、日本の現代アートシーンのよるべなさを、つきはなした視点から笑い飛ばす、石井弘和や笹田晋平の諸謙性はインパクトがあった。また、安田悠、HyonGyon、西村加奈子らの、自分自身のリアリティをつきつめた濃厚な世界観も忘れがたかった。

アートで食っていけるかは、いつの時代も切迫したテーマだが、そもそも人の記憶に刻まれる強さがなければ、美術史には残れないだろう。人に媚びたぬるい作品をつくるより、何百年も語り継がれる名作を生んでほしい。様々な覚悟を問われる不景気の到来は、じつはチャンスの到来でもある。恵まれた条件が揃う「TWS-Emerging」は、そんなアーティスト・サバイバルの格好の実験場だ。初心忘るべからず!

Never forget your beginner's spirit!

NORIKO MIYAMURA Art Editor

Since the financial crisis began, a number of bleak stories from the art world also have reached my ears, making the momentum of the art fairs of one year ago seem all the more incredible. The contemporary art bubble that existed for some time was it itself an unprecedented development, but does it mean now that the bubble has burst, artists are going to throw away their paint brushes? I don't think there is any reason to believe that will happen. From visiting exhibitions of graduate art projects, newcomer competition exhibitions and GEISAI sponsored by Takashi Murakami, all places for unearthing new talent, the people who thrive in adversity and are waiting patiently for their opportunity to arrive stand out from the rest. The euphoric mood with its superficial attitude that is overly concerned with the marketability of the art and a preoccupation with securing a position in a gallery has subsided, and it is only the artists with staying power who will go forward boldly into the future.

In such turbulent times, TWS-Emerging 2008 was held as it is every year. With its association with the Wonder Seeds exhibition, the popular newcomer competition where works can be purchased at the exhibition venue, TWS-Emerging has become a fixture for exhibiting the work of interesting young artists that also attracts dealers and collectors. Now at a time where artists are raising the level of their ambitions, it is not easy to find suitable venues in which to present them. TWS-Emerging offers the unrestricted use of a large space with guidance and support from professional staff, which serves as a valuable opportunity for accumulating experience of holding exhibitions.

Amidst all this, my overall feeling was of the disconnected nature, but in a good sense, of our individual paths. The same projects that were partnered with Tokyo Wonder Wall (TWW), the initial focus of which was on painting, have produced a truly diverse development that includes photography, video and installations, by the launch of the TWW three-dimensional section and the multi-mediatization of expression. Photographic projects with carefully selected concepts, such as those of Yuki Aoyama and Kyoko Ebata, were strong works showing a high-level of finish, and the three-dimensional drawings by Kazuhiro Noda with their emphasis on the extemporariness of a certain time and certain place were filled with the tension of alternative impossibilities, all reminding me of how interesting it is to visit exhibitions.

On the other hand, Hirokazu Ishii and Shinpei Sasada's jokes that from an indifferent perspective laugh off the friendless state of the Japanese contemporary art scene had an impact, and the dense world views of Yu Yasuda, HyonGyon and Kanako Nishimura that thoroughly examine their own reality are not easy to forget.

Whether one can live off art has been a burning question in every generation, but the truth is that unless art has the power to carve itself in people's memories, it will not become a part of history. Instead of the lukewarm work designed to curry favor with other people, I'm waiting to see some masterpieces, something that be will passed down through the centuries. The tough times have arrived and we need to prepare ourselves for them, but the tough times are also a time of opportunity. TWS-Emerging, with its favorable environment is an ideal test site for artist survival. Never forget your beginner's spirit!

内なる自己に愚直に向き合う感性

家村佳代子 (トーキョーワシタ・サイト・プロジェクト)

トーキョー・ワシタ・サイト (TWS) がスタートした7年前では想像できなかったほど、ここ数年は、日本の若手アーティストの様々な展覧会、サポーターが数多く生まれている。そのなかに入って、TWS本郷の「TWS-Emerging」では、参加の人口となる「トーキョー・ワシタ・サイト (TWS)」の入選後、2次審査の面接が行われるまでに、すでに様々な展覧会の予定が入っているアーティストも、今では少なくない。美術関係者が競って美大の卒業制作展に訪れ、吉田買いとも言える状況が訪れているように、TWSの展示もその接点となる機会を提供するようになっていく。さらに「TWS-Emerging」では、注目アーティストの作品をいち早く購入する約束を取り付けようとする問い合わせも増えている (展示会場であるTWS本郷では、作品の販売は行なわれていない)。アートマーケットに関する教育をまったく受けていないアーティスト達が、アート関係者の誰とどのように関係を築いていくのかは、アロのアーティストとして自ら育てていくうえで、今、大きな課題になっている。

2008年は、世界的な経済危機が起こるなか、アメリカでは史上初めての黒人大統領、オバマ政権の誕生を見るなど、21世紀の新しい価値の構築がスタートした転換点である。そのような状況のなかで本年度を振り返ってみると、作品の傾向が変わりつつある。昨年度に多かった、「好きなものだけで私の絵の世界を埋め尽くしたい」というタイトルは影を潜めた。情報が増え、東京の街を前提に、微妙な差異を楽しむ気分を含んだもの、また多様な情報をうまく組み合わせる巧みに着目しているものは、新鮮さが感じられなくなった。逆に、数年前であれば横占趣味と批評されかねないものが注目を集めた。故郷の上着的な生命感に惹きつけられ、それらを油絵具の光の輝きのなかに閉じ込めてしまいたい、仏壇や庭を描く西村加奈子。欲望の大きな木の幹にぶら下がる実 (=僕) に、まるで指でなぞったように鮮やかな色を塗りこめる高倉吉規。祖母の死をきっかけに、老人の部屋を撮影する写真シリーズの制作に打ち込む江幡京子。世の中に溢れる情報とは関係なく、自らの内なるものに忠直とも言えるほど真摯に取り組んだ作品は、軽さよりもその存在感を強く表現している。それは、ウラハラ (東原浩) を歩くより、農作業に週末を使う若者たちが増えている感覚に呼応しているのだろうか。

また本年度の展示作家には、昨年度から始まったTWSの立体部門の入選者が新たに加わっている。野田和宏は、3次元のプロジェクトを行なうように、現場で木棒を組み、扇風機風の風であおって、トラップのような大きなものが動き出す瞬間を表現している。表現したい感覚が、不器用だが直に伝わってくることで、情報が変延している時代に、逆に求められる感性なのだろうか。

The sensibility to single-mindedly confront the inner self

KAYOKO IEMURA, Program Director, Tokyo Wonder Site

Over the past few years, the various exhibitions and support programs for Japanese emerging artists have grown to a level unimaginable seven years ago when Tokyo Wonder Site (TWS) began. Against this background, these days it is not unusual for artists who have been selected for Tokyo Wonder Wall (TWW), which serves as a entry to TWS Hongo's TWS-Emerging exhibition, to have various shows lined up before the interviews that are part of the stage two screening process even take place. We are witnessing people from the art world competing to visit art school graduation work exhibitions and engaging in the equivalent of hiring future graduates earlier than the customary time, with the TWW exhibitions now providing another opportunity for such contact. Moreover, at TWS-Emerging exhibitions, the number of enquiries from people hoping to steal a march on the opposition and obtain guarantees for the purchase of works by high-profile artists is on the rise (works are not sold at TWS Hongo, which is the venue for these shows). How artists who have received no education whatsoever in the art market should go about building relationships and with whom in the art world have become important issues for artists as they seek to become art professionals.

The year 2008 was a turning point in which a new set of 21st century values began to emerge out of the status quo, a beginning marked by among other things the inauguration of the first African American president of the United States, Barack Obama, against the backdrop of the worldwide economic crisis. Looking back on the current fiscal year in light of these circumstances, a change appears to be occurring with regard to trends in artworks. The type of work born out of a desire to "fill the world of my paintings with things I like" that was plentiful the previous year became scarce. Neither works that, taking as their premise Tokyo as a city overflowing with information, incorporated a spirit of enjoying subtle differences, nor works that skillfully expressed a sense of youthfulness by cleverly combining diverse information, seemed fresh any longer. Rather, it was the kinds of works that several years ago would have been criticized as nostalgic that attracted the most attention. Kanako Nishimura, who is drawn to the vernacular feelings of vitality associated with her hometown and paints household Buddhist altars, gardens, and the like out of a desire to trap these feelings in the luminous light of oil paints. Yoshinori Takakura, who fills fruit (=himself) hanging from the branches of a large tree of desire with vivid colors as if tracing them with his fingers. Kyoko Ebata, who, following the death of her grandmother, devoted herself to producing a series of photographs of old people's rooms. Works that tackle in a way that is almost naively honest the artist's inner self without reference to the information that floods the world convey a strong presence rather than a lightness. Perhaps this is in accord with the pervading sensibility that has seen an increase in the number of young people who spend their weekends working in fields rather than walking the streets of "Urahara" (backstreet Harajuku).

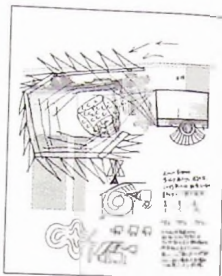
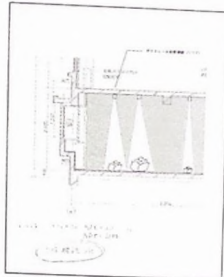
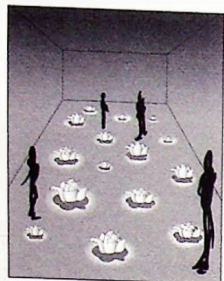
This year's exhibitors also included for the first time artists selected in the three-dimensional category that was included in TWW for the first time last year. Kazuhiro Noda assembled wooden poles as if creating a kind of three-dimensional drawing, incorporating the breeze from an electric fan to represent the moment something big, like a truck, actually starts moving. Perhaps conveying a sense of what it is the artist wants to express, however awkward, is actually what people are seeking in an age of information overload.

COLUMN

個展を成功させるためのスキルを磨こう 文＝白坂ゆり

1 プレゼンテーション

「何を伝えたいのか。展示を協働するためのプレゼンテーション術とは？」
トーキョーワンダーサイト プログラムディレクター家村佳代子さんに聞きました。



（左・中）2006年3月に開催されたTWS-Emerging057 阪田清子「トーキョー・フラワー」のための展示計画図、壁空の中に、和紙の花を置き、それぞれスポットライトが当てられ、その影と同じ形に切り抜いた写真が浮かび上がるというインスタレーションの照明プラン。

（右）野田和宏のトラックの「目」を木組みの立体で表現するためのドローイング。船に気づく必要な素材など、メモを書き込むのも有効だ。使えない場合でも、ストックすればアイデアの引き出しになる。

2 展示設営

「日頃から素材を研究し、何度もつくってみることが大事です」
スーパー・ファクトリーの佐野誠さんに聞きました。



2007年7月に開催された、TWS-Emerging074 池田拓馬「THE OPENING IN THE WALL」のための設営風景より。

「TWS-Emerging」では、審査や展覧会前の打ち合わせ時に、作家がプレゼンテーションを行う。「何をしたいか、実現するための段取りやスケジュール、その2つを人に伝えることが重要です」とトーキョーワンダーサイト(TWS)の家村佳代子プログラムディレクターは語る。

展覧会が決定した作家は、展覧会を共に作るキュレーターやスタッフらと、4カ月前と1カ月前に打ち合わせを行う。1回目の打ち合わせでは、展示計画書、トークイベント・交流プログラム計画書、展示計画図、ポートフォリオ、2回目の打ち合わせでは展示計画書、展示計画図、貸し出し希望機材リスト、搬入設営／撤去搬出作業届、ポートフォリオ・写真など展示作品の説明を用意。指定の用紙や図面などがあり、記入が難しいものではない。

「最終直前で変わることがあってもかまいません。むしろ、打ち合わせのときにやりたいことを話してくれば、知識や経験のある人々とその場で練っていけるのです」。

しかし、なかには、あいさつもなければ、遅刻や無断欠席、手ぶらの作家もいるという。海外に比べ、日本の美大ではアーティスト教育が乏しいとはいえ、共同作業においてコミュニケーションは不可欠だ。

作品を言葉にすることは難しいが、どうにかして伝えようとする姿勢が大切である。たとえば、野田和宏は、展示コンセプトを伝えるために、立体作品の形ができてくるまでの複数のドローイングを見せている。過去には、自らプラン図を作成し、照明計画について最初から話し合いをした阪田清子の例もある。また、鑑賞者にとってコミュニケーションのきっかけとなる展覧会名や作品名

も、的確に付けるようにしたい。イベントやワークショップなど付帯事業を行いたい場合も、スケジュールや人集めなど、事前に相談が必要だ。

「作品を多く搬入するのは良いですが、展示では観る観的になり、何で勝負したいか、自分が大事だと思うことをはっきりさせることは今後の制作にもつながります」。

会場に置くファイルも展示と合わせて編集してみたいところ。人に見せることで客観的な目も養われるだろう。TWSでは、作家が育つことが重視されるため、スタディとして会期オープン後も調整はできる。

さらに、撤去時の現状復帰もあらかじめ考える必要がある。作品のために既存のルールを破る場合は、その後どう元に戻すかも大事な点。わからない点は、展示アドバイザーに相談もできる。

「これじゃなきゃだめというプレゼンテーション法はありません。どうしても相手に伝わるか工夫すること。また、創造性を高めます。完璧じゃなくても、どうにか伝えようとするが、共に展覧会をつくる人々を盛り立てることもなるのです」。

初めてプレゼンテーションする時の新人作家の緊張感と希望、楽しみや期待感に触れることで、TWS側もプレゼンにまつわる煩雑な部分は忘れ、勇気をもらっている。家村ディレクターは語る。「プレゼンや準備、設営の段階でいろいろと困難はあるけれども、その壁を乗り越えて展示が成功したときの作家の喜びは、TWSにとって活動が続けるうえで非常に支えになっています」。

展覧会プランを実現していくプロセスは、作家とTWSスタッフとで話し合いながら行う。しかし、技術面や素材のことで困難が生じたときには、日本屈指の展示アドバイザーのサポートがある。マシュー・バーニー、曾根裕らと協働し、2001年と2005年の横浜トリエンナーレや数多くの美術館で会場施工を手がけている、広島県施工会社「スーパー・ファクトリー」代表の佐野誠さんに、アドバイスを受ける際に必要なことを聞いた。「一番知りたいことは、何をどう見せたいのかということ。何のためにそれをつくりたくて、どういう効果を求めているのか。作品の持つ意味や表現したいことを聞きながら工法などを話し合っていきます」。

池田拓馬は、個展の際、設計図と模型を用いて「壁に穴を空け、取り壊された建物のドアを取り付け、壁の中の構造も見えるインスタレーション」のプランを説明し、どうやって扉を付けるかアドバイスを受けた。その際も「ドアの向こうに行けそうだが、壁の裏側が見え、今立っている空間を意識させられるように」と、表現したいことをよりはっきりさせた。また、建物の構造に関わることもあり、現状復帰の方法も併せて考えた。

「TWS-Emerging」では、制作費を作家が負担する。例えば、木材にしても塗装にしても様々な種類や質がある。同じ効果が得られ、最も安くできる方法を考えることも創造力だ。佐野さんは「この2、3年、番積がないうちからチャンスに恵まれた若手作家が、ものづくりの研究をしなくなっている」と危惧している。曾根裕も東洋も、安い素材を必死に探して制作していた。その過程

で物質の特性を知り、引き出しも増え、作品も良くなっていったのだ。

「頭の中だけでなく、ミニチュアでもいいから何週でもつくってほしいです。そうしたなかから完成形が出てこないうちに外注してしまうのは、作家自身のためにならない」と佐野さん。その人にしか見えないものがあり、それを表現したいのであれば、調べたり、手を動かしたりするのが作家たるもの。例えば「ものを浮かせたい」という思いがあり、どうしたら美しくその状態ができるか、物理的制約を超えて作家がたどり着いたものは面白いが、ものが浮くための原理から構造通りにつくったものには面白みがない。

チャンスだからこそ、新しいことに挑みたい。そのためには研究が必要である。普段から、たとえばコーヒーカップひとつ見ても、それがどのようにできているのかを考えることも、ひとつの訓練になるだろう。の後に、移動してください。佐野さんと仕事をしたら、実際に見て学べるチャンスでもある。年齢は関係ない。技術者と高みをめざせる作家であってほしい。

COLUMN

3 ライティング

「光で見えかたが変わる。作品にとってベストな照明に」
ライティングのエキスパート、中矢清司さんに聞きました。



増子博子さんの展示設置風景。
中央が中矢清司さん。

作品設置中は展示で精一杯、最後になって照明に迷う若手作家は多い。そんなとき、TWSには力強い味方がいる。松下電工時代、数々の美術館・博物館の照明計画を手がけ、村上隆や中村政人らとも協働してきた中矢清司さんだ。退職後も、2000年に「Out of the Blue」で大巻伸嗣のインスタレーションに協力して以来、毎月「TWS-Emerging」の設置最終日にTWS本郷を訪れサポートしてくれている。

「まずは光の当て方や明るさ（照度＝光を受けている面の光の量）を決め、その後、色温度（色み）や演色性（作品の色の再現性）を調整していけばいいと思います」と中矢さん。展示に使用する主な光源はハロゲンランプのスポットライトで、角型と丸型の2種。広範囲を明るくしたい場合は角型を使う。空間全体に均等に光を当てたい場合は、スポットライトの先端に拡散フィルターをつける。インスタレーションなどで蛍光灯のみを点灯することもあれば、蛍光灯とスポットライトを組み合わせることもある。作品からスポットまでの距離は1m以上取り、作品の斜め45度から光を当てる「レズラント光」が作品を引き立たせる。また、光が一定である北窓からの自然光が理想と言われる。

「ただ、作品をどう見せたいかによって求める光も違いますから、作家と話し合いながら作業を進めていまね」と中矢さんは言う。増子博子さんの設置例を見てみよう。増子さんは「梁に光が当たり、影が出てしまう」と中矢さんに相談。梁の下に絵画を掛けないよう勧めるも、スポットの位置を変え、スポットの側面にバンドア（仕切

り板）代わりにアルミシートで遮光し、梁に光が当たらないようにした。次に、中矢さんは、画面の中で一番見せたい部分を聞き、丸型スポットライトの光の焦点がそこに当たるように位置と向きを変えると、雰囲気グッと良くなった。また、ハロゲンランプは明るさを調光すると色温度が下がり、光が赤くなるため（例えば2800Kが、2500Kや2000Kに）、白い光にしたいときは、青いコンバージョンフィルターをかけて色温度を上げる（3500Kまたは4000Kなど）。基準となる光を1か所決め、合わせて他も調整していくと、照明器具のレイアウトも整然となった。「アトリエではどんな光で制作しているの？」などと尋ねながら、作品にとってより良い光を探し、実際に光を当ててみせるやりとりから、TWSスタッフも作家も多くを学んでいる。

近年は、日置智也のように、光をインスタレーション作品の要素として考える作家も出てきた。シムラユスケは、フレーム通りに光が四角く切れるレンズスポットで写真を展示した。作品をどんな光で見せたいのか、展示前に空間を下見する際に、できるだけ様々な時間帯の光の状態を見て、展示プランと一緒に考えた。

＊色温度：太陽光を基準とした色み。単位はK（ケルビン）。数値が大きくなるほど、昼の太陽光に近い青白い光になり、小さくなるほど夕方に近い黄みや赤みのある光になる。ちなみに蛍光灯の昼光色は6500K、昼白色は5000K、電球系のハロゲンランプは2800K

ARTIST PROFILES

097 安田悠 Yu Yasuda

1982 香川県生まれ
2007 武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース
修了
現在 東京都在住

主な個展
2007 「安田 悠」 GALLERY b TOKYO、東京
2008 「トーキョーワンダーウォール都庁2007
境界でゆるる展」 東京都庁

主なグループ展
2007 「ART AWARD TOKYO」 行幸地下ギャラリー、東京
「トーキョーワンダーウォール公募2007」
トーキョーワンダーウォール賞、東京都現代美術館
「TOKYO'EYE 01」 DAIMARU TOKYO ART GALLERY、東京
2008 「VOCA展 2008」 上野の森美術館
「If you're happy, clap your hands - Japanese artists
born in 80」 Andrew James Art、上海
「ゼロの虹」 MA2 GALLERY、東京
2009 「トヨタアートコレクション2008」
軽井沢アートサロン、長野



098 シムラユスケ Yusuke Shimura

1981 千葉県生まれ
現在 東京都在住
主な個展
2006 「Yusuke Shimura」 ANTEPRIMA、東京
2007 「YUSUKE SHIMURA X Applestore "Magictime"」
アップルストア銀座、心斎橋、渋谷
2008 「Yusuke Shimura」 CIBONE quadra gallery、東京

主なグループ展
2007 「NEXT DOOR」 T&G ARTS、東京
「ワンダーシード2007」 入選、
トーキョーワンダーサイト渋谷
「トーキョーワンダーウォール公募2007」 入選、
東京都現代美術館



099 朴賢京 HyonGyon

1979 韓国生まれ
2002 Mokwon大学西洋画科卒業
2008 京都市立芸術大学大学院絵画専攻油画修了
現在 京都市立芸術大学大学院博士課程在籍

主な個展
2008 「トーキョーワンダーウォール都庁2007 HyonGyon展」
東京都庁
「いよいよ / iyoioyo」 magical art room、東京

主なグループ展
2006 「art camp」 Gallery Yamaguchi Kunst-Bau、大阪
「AMUSE ART JAM 2006 in KYOTO」 京都文化博物館
2007 「brilliant works」 art project room ARTZONE、京都
「ART AWARD TOKYO」 行幸地下ギャラリー、東京
「Hello Chelsea! 2007 Final selections」 PS35 Gallery、NY
「トーキョーワンダーウォール公募2007」
トーキョーワンダーウォール賞、東京都現代美術館
「worm hole episode7」 magical art room、東京
2008 「NEW BEGINNING - The show must go on!」
magical art room、東京





100 高倉吉規 Yoshinori Takakura

1981 東京都生まれ
2006 東京造形大学美術学部卒業
2008 東京藝術大学大学院終了
現在 東京都在住

主な個展

2007 「メメントモリ」ギャラリーK、東京
2008 「トーキョーワンダーウォール都庁2007 高倉吉規展」
東京都庁

主なグループ展

2007 「トーキョーワンダーウォール公募2007」
トーキョーワンダーウォール賞、東京都現代美術館
「YJP 今、絵を描くということ」
gallery ART UNLIMITED、東京
「ピカン展」山崎ギャラリー、東京
2008 「ワンダーシード2008」入選、
トーキョーワンダーサイト渋谷



101 塩川直子 Naoko Shiokawa

1983 神奈川県生まれ
2008 多摩美術大学彫刻学科卒業
現在 神奈川県在住

主なグループ展

2005 「アート学生展覧会in NY」イセカルチュラルファン
デーションギャラリー、U.S.A.
2006 「アートプログラム習得2006・緑化する感性」
寄梅植物工芸協同組合敷地内、東京
2007 「トーキョーワンダーウォール公募2007」入選、
東京都現代美術館

「しおかわなおこ-20年前の家族-」Gallery space1/3、多摩美
術大学彫刻棟内、東京
「多摩美術大学彫刻展2007」八王子市いちようホール、東京
「創造と森の声2007横浜の森美術展2」横浜動物の森公園、横浜
「出会いのよりしろ-総天然色の無意識-」東京都青梅市内各所
「たまびば-明日の方向-」スーパーアルプス多摩店、東京



102 青山裕企 Yuki Aoyama

1978 新潟県生まれ
2005 筑波大学卒業
現在 東京都在住

主な個展

2005 「空跳博-JUMP EXPO 2005-」PUNCTUM、東京
2007 「ソラリーマン-JUMPING PAPAS-」新宿眼科画廊、東京
2008 「undercover」和田画廊、東京

主なグループ展

2006 「THE EXPOSED of the art vol.1 PHOTOGRAPHS
(椿昇×後藤繁雄)」海岸通ギャラリーCASO、大阪
「第34回 社団法人日本広告写真家協会公募展」入選、
大阪市立美術館／東京都写真美術館
2007 「写真新世紀 東京展2007」優秀賞(南雄史生選)、
東京都写真美術館
「ワンダーシード2007」入選、
トーキョーワンダーサイト渋谷、東京
「トーキョーワンダーウォール公募2007」入選、
東京都現代美術館



103 黒川彰宣 Akinobu Kurokawa

1974 大阪府生まれ
1999 京都市立芸術大学美術学部美術科彫刻専攻卒業
現在 大阪府在住

主な個展

2002 「shadow of style」アーツスペース虹、京都
2004 「黒川彰宣展」アーツスペース虹、京都
2005 「途端中」児玉画廊、大阪
2007 「gatekeepers」ザ・パレスサイドホテル、京都

主なグループ展

2003 「art in transit」ザ・パレスサイドホテル、京都
「trans-」京都芸術センター
2004 「Re Sports」スタジオアーカ、大阪
2005 「ignore your perspective」児玉画廊、東京
2007 「readymade / remix」ヴォイスギャラリー、京都
「トーキョーワンダーウォール公募2007」入選、
東京都現代美術館



104 吉田真由子 Mayuko Yoshida

1975 静岡県生まれ

2001 The State University of New York at Albany,
Department of Theatre卒業

現在 東京都在住

主な個展

2006 「とらわれ」ギャラリーQ、東京

2007 「沈黙を破ってはならない」荻房階段下、東京
「magma」アトランティコギャラリー、東京

2008 「天を仰いで沈んでいく」現代ハイツGallery Den、東京
「to ashes」荻房階段下、東京

主なグループ展

2006 「ラスト・スパート2006展」ギャラリーQ、東京

2007 「トーキョーワンダーウォール公募2007」入選、
東京都現代美術館
「The Party」ギャラリーQ、東京



105 江幡京子 Kyoko Ebata

1973 東京都生まれ

1997 ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ、
美術史/芸術学部卒業

現在 東京都在住

主な個展

2002 「The Usual Passages」

THINK ZONE (森美術館準備室)、東京

主なグループ展

2004 「MEDIARENA: contemporary art from Japan」
The Govett-Brewster Art Gallery、ニュージーランド

2006 「Culture of Fear」ACC GALERIE WEIMAR、Halle 14、
ワイマール/ライプツヒ

2007 「トーキョーワンダーウォール公募2007」入選、
東京都現代美術館



106 渋谷奈緒 Nao Shibuya

1979 愛知県生まれ

2002 武蔵野美術大学映像学科卒業

2004-2006 渡独 (ライブチヒ、ベルリン)

現在 東京都在住

主な個展

2003 「home-往復書簡-」site、東京

主なグループ展

2003 「トーキョーワンダーウォール公募2003」入選、
東京都現代美術館

「0号展」入選、トーキョーワンダーサイト本郷、東京
「キャノンデジタルグラフィックアワーズ」
スパイラル、東京

2007 「トーキョーワンダーウォール公募2007」入選、
東京都現代美術館



107 日置智也 Tomoya Hioki

1984 岡山県生まれ

2007 大阪芸術大学彫刻科卒業

現在 大阪芸術大学大学院彫刻科在籍

主な個展

2008 「トーキョーワンダーウォール都庁2007 日置智也展」
東京都庁

主なグループ展

2007 「トーキョーワンダーウォール公募2007」審査員長賞、
東京都現代美術館



108 石井弘和 Hirokazu Ishii

1982 神奈川県生まれ
2008 多摩美術大学大学院美術研究科卒業
現在 神奈川県在住

主な個展

2008 「マネケンa.k.a. マネキン展」 フタバ画廊、東京

主なグループ展

2006 「a lot of...展」 フタバ画廊、東京
「第3回REUNITED展」 横浜市民ギャラリーあざみ野
2007 「トーキョーワンダーウォール公募2007」 入選、
東京都現代美術館
「第4回REUNITED展」 横浜市民ギャラリーあざみ野、
2008 「7人の新人展」
ギャラリー・ショウ・コンテンポラリー・アート、東京



109 笹田晋平 Shinpei Sasada

1984 大阪府生まれ
2007 神戸大学発達科学部卒業
現在 大阪府在住

主な個展

2007 「トーキョーワンダーウォール都庁2007 笹田晋平展」
東京都庁

主なグループ展

2007 「トーキョーワンダーウォール公募2007」
トーキョーワンダーウォール賞、東京都現代美術館
「P&E (Presentation & Exhibition @ ARTCOURT Gallery)」
アートコートギャラリー、大阪



110 永島千裕 Chihiro Nagashima

1983 静岡県生まれ
2006 京都嵯峨芸術大学卒業
現在 東京都在住

主な個展

2007 「うだいの森」 青柳画廊、銀座
「トーキョーワンダーウォール都庁2007 永島千裕展」
東京都庁
2008 「永島千裕展」 たけだ美術、銀座
「at the space time」 イムラアートギャラリー、京都

主なグループ展

2004 「トーキョーワンダーウォール公募2004」 入選、
東京都現代美術館
2005 「中村邸にて。展」 北海道
「DISCOVERY2005」 青柳画廊、銀座
2007 「トーキョーワンダーウォール公募2007」
トーキョーワンダーウォール大賞、東京都現代美術館
2008 「ワンダーシード2008」 入選、
トーキョーワンダーサイト澁谷



111 伊藤雅恵 Masae Itoh

1982 愛知県生まれ
2005 武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
現在 東京都在住

主な個展

2006 「ラインのむこうのギャラクシー」 藍画廊、東京
2007 「ドラマティックス」
Bunkamura GALLERY+/アーツ&クラフツ、東京
「モンスター・イン・ミー」 藍画廊、東京
2008 「トーキョーワンダーウォール都庁2007
ふさわしいけしき」 東京都庁

「伊藤雅恵個展」 野田コンテンポラリー、愛知

主なグループ展

2006 「Secret Play」 イリーガリンガレージ、東京
2007 「トーキョーワンダーウォール公募2007」
トーキョーワンダーウォール賞、東京都現代美術館
2008 「VOCA展2008」 佳作賞、上野の森美術館、東京
「絵画の春」 鎌倉画廊、神奈川
「These Artists Are Good!」
NODA CONTEMPORARY BEIJING、北京



112 西村加奈子 Kanako Nishimura

1981 広島県生まれ
2007 多摩美術大学美術学部油画専攻卒業
現在 東京都在住

主なグループ展
2007 「トーキョーワンダーウォール公募2007」
トーキョーワンダーウォール賞、東京都現代美術館

主な個展
2006 「garden」 鎌倉青年美術館、東京
2008 「トーキョーワンダーウォール都庁2007 西村加奈子展」
東京都庁



113 野田和宏 Kazuhiro Noda

1982 鳥取県生まれ
2005 東京造形大学絵画専攻卒業
2007 東京芸術大学大学院修士課程修了
現在 茨城県在住

主なグループ展
2005 「日韓友情年2005 日韓芸術交流展 -ssugoremigi-」 韓国
「サスティナブル・アートプロジェクト2005 台東・宮間
通り現代美術館「宮の伝えー町も人を見つめるー」」
東京



114 真坂亮平 Ryohei Masaka

1980 愛知県生まれ
2006 名古屋芸術大学大学院美術研究科造形専攻修了
現在 愛知県在住

主な個展
2004 「ひきのばされた袋小路」 ガレリア・フィナルテ、愛知
2006 「切り取ったロケット」 名古屋市市民ギャラリー矢田
第一展示室
2008 「ドラマティックでない」 Space+、愛知

主なグループ展
2005 「site scenes / プレーメン・ナゴヤ アートプロジェクト」
元味増蔵金漬、愛知 西春町
2006 「site scenes / プレーメン・ナゴヤ アートプロジェクト」
元寶蔵署、ドイツ・プレーメン
2007 「トーキョーワンダーウォール公募2007」 入選、
東京都現代美術館



115 増子博子 Hiroko Masuko

1982 宮城県生まれ
2006 東北工業大学工芸意匠学科卒業
2008 宮城教育大学大学院教育学研究科教科
教育専攻美術教育専修修了
現在 栃木県在住

主な個展
2007 「トーキョーワンダーウォール都庁2007 増子博子展」
東京都庁
2008 「木十人」 ギャラリーJIN、東京

主なグループ展
2007 「トーキョーワンダーウォール公募2007」
トーキョーワンダーウォール賞、東京都現代美術館
「第28回グラフィックアート「ひとつば展」」 入選、
ガーディアンガーデン、東京
「AMUSE ART JAM 2007 in 京都」 一般人気投票賞、
京都文化博物館
2008 「SECRET AUCTION@KANDADA」
project space KANDADA、東京

トーキョーワンダーサイト

トーキョーワンダーサイトは、東京から新しい芸術文化を創造・発信するアートセンターです。若手アーティストの支援・育成の場、TWS本郷。国際的な芸術文化ネットワークのハブとして国内外の文化機関と連携しながら、若手から国際的に活躍するアーティストまでが発表・交流を行う場、TWS渋谷。国際交流拠点として創造的な制作・対話・教育を行う場、TWS青山クリエイター・イン・レジデンス。3館を拠点に、「世界創造都市・東京」のプラットフォームとして活動を展開しています。

Tokyo Wonder Site

Institution of Contemporary Art and International Cultural Exchange, Tokyo.

Tokyo Wonder Site is an art center dedicated to the generation and promotion of new art and culture from the heart of Tokyo. While TWS Hongo supports and nurtures young talent in all fields in programs related to the government-hosted "Tokyo Wonder Wall" exhibition of works chosen from among entries from the general public, TWS Shibuya is a hub in a global cultural network of affiliated cultural facilities in Japan and abroad, and at once a platform for both new talents and internationally active artists to exchange and showcase their works. TWS Aoyama: Creator-in-Residence opened in 2006 as a venue for creative individuals from all genres and nationalities to pursue their respective work in a shared process. Through various joint programs, the three venues will continue their broad array of artistic activities in order to provide artists with a stage for creative work.

<http://www.tokyo-ws.org/>

TWS-Emerging 2008

Tokyo Wonder Site Emerging Artist Support Program

展覧会

会場：トーキョーワンダーサイト本郷

会期：2008年6月7日(土) — 2009年3月8日(日)

(全7会期19個展を開催)

主催：財団法人東京都歴史文化財団 トーキョーワンダーサイト

カタログ

編集：宮村周子、鈴木真子 (来来/LaiRai)

家村佳代子、吉田雄一郎、宇多村英恵 (トーキョーワンダーサイト)

翻訳：パメラ・ミキ、マシュー・ターナー (三木アソシエイツ)

写真：田附勝 (表紙、P.8、P.12)、加藤健

デザイン：落合慶紀 (ガレージ)

印刷：株式会社ヨシダコーポレーション

発行：財団法人東京都歴史文化財団 トーキョーワンダーサイト

東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山SOUTH棟3F

発行日：2009年3月31日

EXHIBITION

Venue: Tokyo Wonder Site Hongo

Date: June 7, 2008 - March 8, 2009

(Nineteen solo shows staged over seven periods)

Organizers: Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture,
Tokyo Wonder Site

CATALOGUE

Editorial Staff: Noriko Miyamura, Shinko Suzuki (LaiRai)

Kayoko Iemura, Yuichiro Yoshida, Hanae Utamura (Tokyo Wonder Site)

Translation: Pamela Miki, Matthew Turner (Miki Associates)

Photo: Masaru Tatsuki (COVER, p.8 and p.12), Ken Kato

Design: Yoshinori Ochiai (GARAGE Ltd.)

Printing: Yoshida Corporation

Published by: Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture,
Tokyo Wonder Site

COSMOS Aoyama SOUTH 3F, 5-53-67 Jingumae, Shibuya-ku, Tokyo

Publication Date: March 31, 2009



tokyo wonder site

Institute of Contemporary Art and
International Cultural Exchange, Tokyo

